

公募テーマ：

「未来のブカツビジョン」の実現に関するテーマ

D- I 「部活動地域移行の受け皿モデル創出に向けた実証」

浦幌町から発展する

子供のスポーツ環境を核とした地域の持続可能な価値循環モデル
(アスリートの知見を活用した地域ステークホルダーの学び合い)

事業者名：一般社団法人A-bank北海道



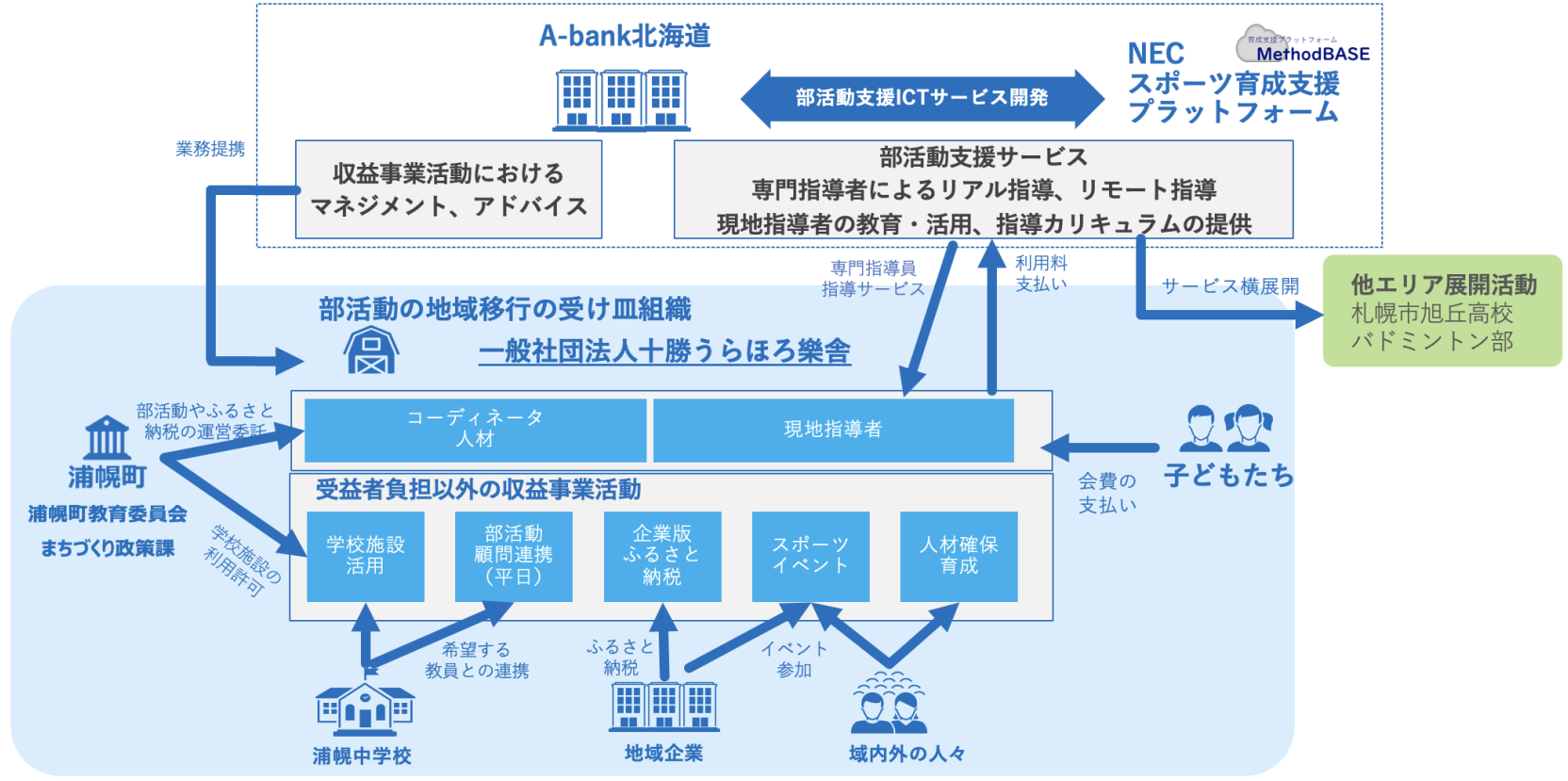
目次

1. 目指す姿
 - a. 目指す姿
 - b. 各ステークホルダーの役割
2. 本実証で実証する課題とそのポイント
 - a. 各ステークホルダーの課題
 - b. 実証ポイント
3. 実証内容とその成果
 - a. 実証の概要
 - b. 課題ごとの取組結果
 - c. 実証から得られた示唆
 - d. その他活動に関する報告
4. 今後の目指す姿
 - a. 本実証を踏まえた目指す姿
 - b. 目指す姿に向けたロードマップ
 - c. 事業収支計画

1. 目指す姿

目指す姿

北海道浦幌町の部活動の地域移行を見据え、A-bank北海道によるICTを活用した指導サービス・アスリートを活用した収益事業のプロデュースを実施。地域側でコーディネーター・受け皿を組成し、自治体や学校、保護者等のステークホルダー調整、収益事業を推進し持続的な活動を目指す。



各ステークホルダーの役割

実証トータル マネジメント事業者

- 一般社団法人A-bank北海道
 - 実証事業におけるプロジェクトデザインとマネジメント
 - 元アスリートを活用した「新たな指導サービスの実証」と「収益事業のプロデュース」

実証自治体 (北海道浦幌町)

- 北海道浦幌町
 - 部活動の地域移行に関するロードマップの策定
 - 町内ステークホルダーとの各種調整により地域における部活動の地域移行への理解向上

地域コーディネーター 地域の受け皿組織

- 一般社団法人十勝うらほろ楽舎
 - 自治体・教育委員会とロードマップ整理支援
 - 各ステークホルダーと共に部活動の地域移行を推進するコーディネーター・受け皿組織
 - 地域における受け皿としての機能を果たすため収益事業の実施

ICT利活用

- 日本電気株式会社（NEC）
 - ハイブリッド指導型のサービスを実現するプラットフォームの提供
 - ビジネスモデル策定支援

2.本実証で実証する課題とそのポイント

一般社団法人A-bank北海道



主な事業

アスリート先生

派遣数

延べ**178校**
16,762名の
児童・生徒
※2014年度～2021年度

完全無償
継続派遣



札幌市立の小中学校の体育の授業にアスリートを「先生」として継続派遣する事業

後援・許可： 札幌市 ・ 札幌市教育委員会

札幌市中学校運動部活動 アスリート派遣事業

派遣数

延べ**113部**
※2016年度～
2021年度

1年間
継続派遣



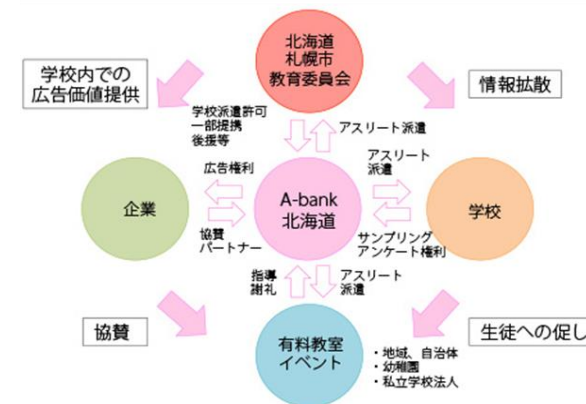
競技経験のない教員が顧問を務める部活動へアスリートを派遣。2022年度は札幌市内8種目24の部活動へ派遣

A-bank北海道は、行政・教育・企業・アスリートの四位一体の協力で、北海道内の各教育委員会から委託を受け、多数の部活動指導、体育授業へ指導者を派遣している。代表理事の曾田雄志が十勝うらほろ楽舎の理事も務めていることから、十勝うらほろ楽舎と業務提携し「うらほろスタジアム」事業のプロデュース、アスリートを活用した収益事業サポート等で連携。本実証では、実証事業のプロダクトデザインやトータルマネジメント、元アスリートの専門指導者を派遣し新たな指導モデルの実証、指導メソッドの構築、指導の際のコーディネート業務を行う。

『産官学アスリート』による連携

アスリート先生は、行政機関からの委託費ではなく、この活動に賛同してくださる企業からの協賛金によってまかなわれており、これによりアスリートの無償派遣が可能となっています。

協賛企業には、派遣学校内における製品サンプリングや、チラシ、アンケートの配布などの実施権利が生じます。これは教育委員会からの許可のもと行使される、協賛企業がもつ正式な権利であり、アスリート先生が成り立つための根幹となる仕組みの一部です。



本実証における課題認識

- ・ 部活動の地域移行の流れに伴い問合せが増えてきているが、リソースに限りがある。
- ・ これまでの部活動への指導事業モデルでは、受益者負担のみでの活動継続は難しいため、他のスキームの構築が必要と考えている。

本実証における検証ポイント

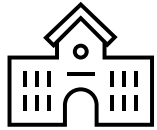
- ・ ICTを活用し現有リソースでの部活動へのサービス事業の可能性を見出すことができるか。
- ・ 収益事業のノウハウを、浦幌町に還元することで、新たな財源を生み、部活動地域移行の財源に充てられるか、浦幌町にて検証する。

北海道浦幌町

浦幌町の概要

- 北海道浦幌町は、人口約4,400人 農林水産業が盛んで、食糧自給率は3,000%と高い数字を誇る
- ただし、人口減少が進んでおり、社会の課題先進地でもある

(浦幌町の学校の現状)



町内：小学校 2校

浦幌小学校の生徒数
(158人)

上浦幌小学校の生徒数
(26人)

浦幌中学校にある部活

陸上部、バドミントン部
サッカー部 (本別と合同チーム)
野球部(豊頃・池田と合同チーム)



町内：中学校 2校

浦幌中学校の生徒数
(84人)

上浦幌中学校の生徒数
(13人)

上浦幌中学校にある部活

陸上部
バドミントン部

(浦幌町の地理関係)



本実証における検証ポイント

- ・地域のコーディネータ (将来の受け皿組織) として、十勝うらほろ 楽舎 (次項) による環境整備が子供たちにとって有効か。
- ・ICTを活用するサービスで距離・コスト・時間の課題を解消できるか。
- ・受益者負担以外の収益事業の実践で、事業継続できる可能性があるか。

本実証における課題認識

- ・子供たちがスポーツを選択できる環境が少なくなってきた。
- ・部活動の地域移行でも専門指導者を毎回雇用するには北海道での距離・コスト・時間に課題がある。
- ・また、それを継続するための財源の確保も必要。

一般社団法人十勝うらほろ楽舎

現在の活動

- 令和3年度から実施している第四期まちづくり計画の一環で、内閣府地方創生交付金や**企業版ふるさと納税**などを活用しながら**町と連携し、地域の課題解決を行う地域づくり組織**
- 地元事業者、元企業人、元省庁、企業出向者や副業者などの中堅世代に加え、大学卒業後に飛び込んできた若者やUターンしてきた浦幌出身者など多様なメンバーで構成。
- **小学校・中学校の9年間、総合学習の時間を活用し地域で子供たちを育む**
「うらほろスタイル」を地域のまちづくり団体である十勝うらほろ楽舎が運営
- スポーツにおいては「うらほろスタジアム」を運営。マラソン大会、アスリート教室などを運営

■うらほろスタイル活動



総合学習の時間を活用した農業体験



■うらほろスタジアム活動



うらほろマラソン



アスリート教室

うらほろスタジアムの取り組みに関して

現在の活動

- スポーツを通して、変化の激しい時代を生き抜いて行けるたくましく豊かなひとを育むプロジェクト
- 地域をフィールドに、アスリートや企業と協働し新たな学びのあり方をつくることを目標とする
- 日常の指導を行いつつ、うらほろマラソンやアスリート教室、子どもたちをプロの世界に触れるツアーに連れて行くなどの企画も実施している



スポーツにより育まれる「たくましさ」
 スポーツにより身につく「豊かさ」
 未来を担う人にとって、
 なくてはならないこれらのチカラ。
 チーム・地域・社会にとっても大切なチカラだ。
 アスリートの意志、情熱、地域のあたたかさ、
 企業のみなさまの継続力
 これらを掛け合わせ、
 スポーツを軸にした「ひとづくり」「まちづくり」
 うらほろスタジアムでは、
 多様なひとが協働し学びあいながら、
 たくましく豊かなひと・社会を
 つくっていくことを目指します。



大迫傑選手と協働したうらほろマラソン



石川直樹選手と協働したコンサドーレツアー



日常の指導（少年団・部活動）



森本稀哲選手などと協働するアスリート教室

ホームページは
こちら

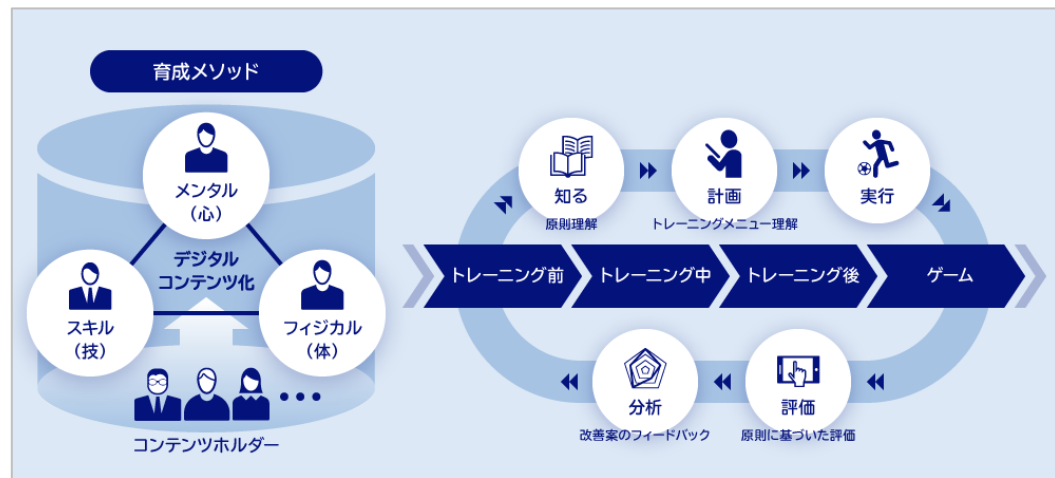


日本電気株式会社 (NEC)

現在の活動

- スポーツの現場にて、指導者の属人化されたノウハウを形式化し、チーム内での情報共有を可能にする「スポーツ育成支援プラットフォーム」(※以降、本資料では「MethodBASE」と表現)を展開中。
- Jリーグ育成年代チーム(アカデミー)やラグビープロチーム等、プロ/セミプロチームへサービスを展開中。

スポーツ育成支援プラットフォーム



サービスの全体像(指導におけるPDCAをサポート)



本実証における課題認識

- ・ 現在、スポーツチームに展開しているサービスが、部活動の地域移行を推進する組織が実施する指導現場でどのように利活用されるか、どのような効果があるのか実践経験が不足している。

本実証における検証ポイント

- ・ A-bank北海道の専門指導者のノウハウを搭載した形で、サービスを活用し、部活動の地域移行の対象に対する利活用が成立するか。
- ・ 教員の負担軽減や指導の質の向上、子供たちの満足度向上に繋がるか浦幌町にて検証する。

本メンバー構成で実証する課題とそのポイント

1

人口が少ない地域では地域や学校の枠を超えた協力によって子供のスポーツ環境をいかに充実させるのか？

- リアル&リモート（ICT活用）でのハイブリッド指導で教員の負担軽減に繋がるかを検証
- 域内外が連携し、子供たちのスポーツ環境（人数・質・距離）の向上に繋がるかを検証

2

地域/まちづくり団体/部活動支援事業者が一体となる事業で地域移行にかかる費用を確保できるのか？

- 協議会を発足し、域内での意識醸成により地域移行がスムーズに進むかを検証
- 事業継続するための財源（受益者、受益者以外）や担い手の確保が可能かを検証

3

部活動におけるICTの利活用は事業の継続・拡大に寄与できるか？

- ICTを活用し、人件費・時間効率化の実証を行い、事業性が見込めるかを検証
- 別エリアでのハイブリッド指導サービスの事業展開の可能性を検証

3.実証内容とその成果

実証の概要（全体像）

	実証（検証）ポイント		各施策の内容	実証結果	ページ
	課題	検証ポイント			
①	人口が少ない地域では地域や学校の枠を超えた協力によって子供のスポーツ環境をいかに充実させるのか？	教員の負荷軽減	A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践（サッカー、バトミントン）	○	14～23
		域内外が連携し、スポーツ環境の整備（少子化対策）	B 小・中学校を巻き込んだ9年間の一貫指導の実践	○	24～26
			C 近隣市町村との連携	○	27～28
②	地域/まちづくり団体/ 部活動支援事業者が一体となる事業で地域移行にかかる費用を確保できるのか？	浦幌町における意識醸成	A うらほろ未来のブカツ協議会を発足し、地域移行の目指す姿を協議	○	29～33
		自走化のための収益事業（受益者負担以外の検討）	B 収益事業の展開 企業版ふるさと納税の活用	○	34～36
			C 収益事業の展開 商品開発（イベント）	○	37～38
			D 収益事業の展開 商品開発（グッズ販売）	△23年以降	39
			E 域内で活躍するスタッフの確保（マネジメント/指導者）	○	40
		地域担い手不足の解消	F するに限らず、スポーツをささえる参加者の増加アプローチの検討	△23年以降	41
③	部活動におけるICTの利活用は事業の継続・拡大に寄与できるか？	事業可能性（人件費、時間効率化）の可能性検証	A ハイブリッド指導の実践による事業性（コスト・時間・機能面）の検証	○	42～46
			B 別エリアでの事業展開の可能性の検討（札幌市）	○今後展開	47～49

①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践 (サッカー,バトミントン)

■実証の目的

■教員の負担や競技未経験顧問の指導によって子供たちのモチベーションが低くなる中、A-bank北海道によるMethodBASEを活用したハイブリッド指導サービスが有効的手段か検証する。

概要	・ A-bank北海道による浦幌中学校サッカー部のハイブリッド指導型の指導の実施
実施メンバー	・ A-bank北海道（専門指導者によるハイブリッド指導の実施、MethodBASEへのトレーニングメニューの構築、日々のトレーニングメニューの提供） ・ 浦幌中学校（実証フィールド） ・ 十勝うらほろ楽舎（地域コーディネーター）
実施場所	・ 浦幌中学校体育館 ・ リモートサポート（Zoom、NECのPFを利用） ・ 浦幌町総合スポーツセンター
実施内容	・ 土日いずれかのリアル指導の実施 ・ 平日における指導プログラムの提供 ・ 共有ツールを活用しPDCAの共有 ・ リアル&リモートでのPDCAサポート

■当初の課題

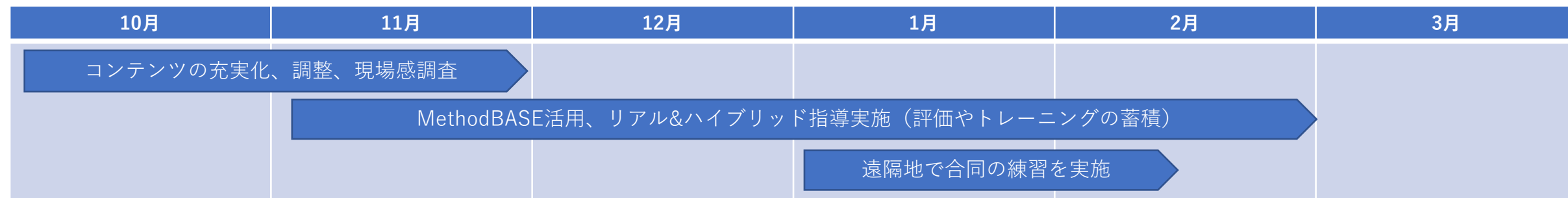
- ・ 教員、地域の一般指導者が学ぶ機会がなくトレーニングメニューの偏り
- ・ 変化の少ない指導方法が繰り返されることによる子供たちのモチベーション低下
- ・ 浦幌町という都市部から離れた地域でも質の高い指導を提供する必要がある

■活動内容 ※後掲

- ・ 専門指導者（元アスリート）による現地でのリアル指導
- ・ 専門指導者（元アスリート）によるオンラインを活用したリモート指導の実施
- ・ MethodBASEを用いたトレーニング計画の構築と、振り返りの蓄積

■課題に対する検証ポイント

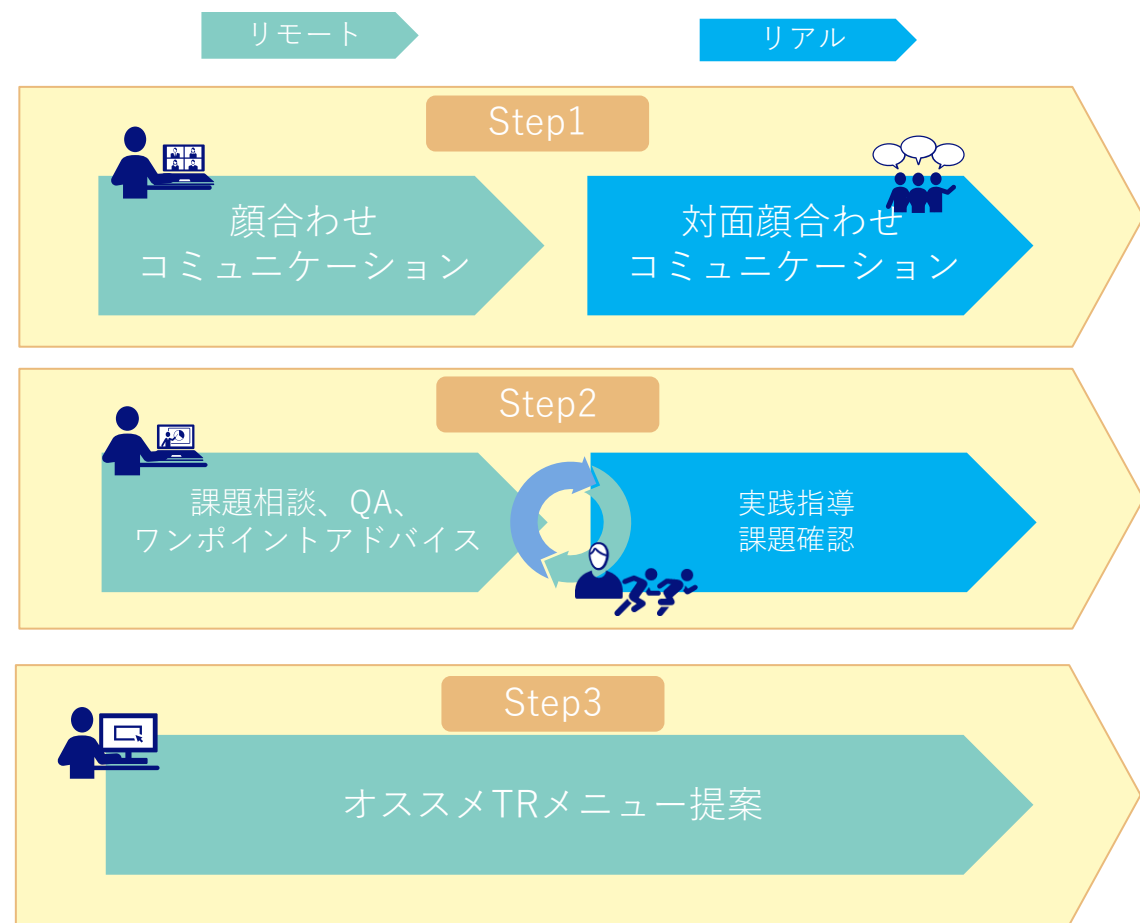
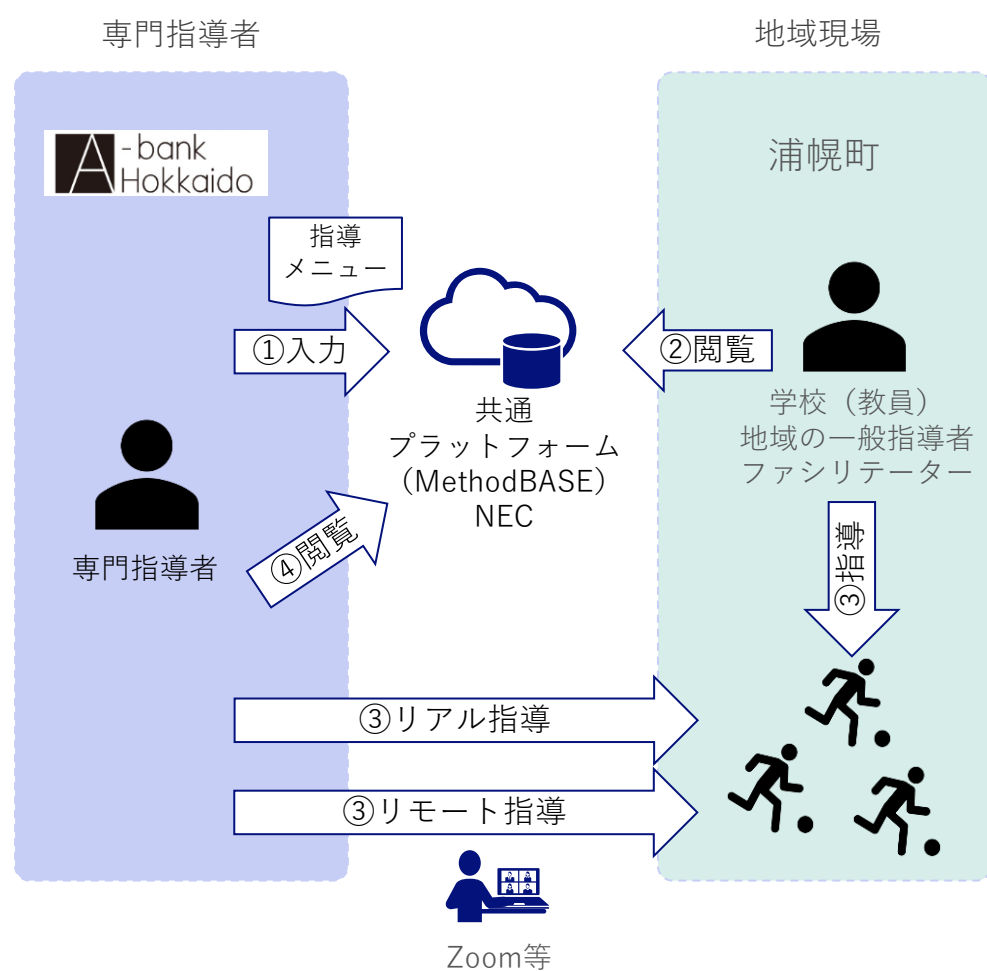
- ・ トレーニングコンテンツの充実化により教員の負担軽減につながるか？
- ・ 専門指導者（元アスリート）による指導は子供たちの満足度向上につながるか？
- ・ MethodBASEを活用し、地域の一般指導者の指導の質の向上につながるか？



①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践 (サッカー,バトミントン)

■ハイブリット指導指導の内容

■専門指導者による、定期的（休日）なリアル（現地指導）とリモート指導の実施に加え、平日も専門指導者からのトレーニングメニューを提供することで、教員の負担を軽減するサービス



①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践 (サッカー,バトミントン)

具体的な活動の流れ

■以下のサイクルで活動を実施（1ヶ月の活動例）

サッカースケジュール

日	月	火	水	木	金	土
OFF	OFF	リアル指導 専門指導者	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)
日	月	火	水	木	金	土
OFF	OFF	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	リモート指導 専門指導者	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)
日	月	火	水	木	金	土
OFF	OFF	リアル指導 専門指導者	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)
日	月	火	水	木	金	土
OFF	OFF	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)	リモート指導 専門指導者	部活動 活動日 (一般指導者)	部活動 活動日 (一般指導者)

バドミントンスケジュール

日	月	火	水	木	金	土
OFF	部活動 活動日	部活動 活動日	部活動 活動日	OFF	部活動 活動日	リアル指導 専門指導者
日	月	火	水	木	金	土
OFF	部活動 活動日	部活動 活動日	部活動 活動日	OFF	リモート指導 専門指導者	部活動 活動日
日	月	火	水	木	金	土
OFF	部活動 活動日	部活動 活動日	部活動 活動日	OFF	部活動 活動日	リアル指導 専門指導者
日	月	火	水	木	金	土
OFF	部活動 活動日	部活動 活動日	部活動 活動日	OFF	リモート指導 専門指導者	部活動 活動日

- ・ハイブリット指導は、専門指導者によるリアル・リモート指導
- ・部活動活動日に関しては、地域の一般指導者が指導
(十勝うらほろ楽舎の越膳氏)
- ・部活動活動日は、**MethodBASEによりメニューを専門指導者から提供**

- ・ハイブリット指導は、専門指導者によるリアル・リモート指導
- ・部活動活動日に関しては、教員が指導
- ・部活動活動日は、**MethodBASEによりメニューを専門指導者から提供**

①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践（サッカー、バトミントン）

■サッカーの活動内容

■ハイブリッド指導

- ・リアル指導とリモート指導を毎週交互に実施。（A-bank北海道の専門指導者 曾田氏（元Jリーガー）が指導）
- ・リアル指導では、子供たち・地域の一般指導者とのコミュニケーションを重視し、スキル練習以外にも、基礎技術の大切さ、意識ポイントはどこかなど丁寧にリアル指導を実施
- ・リモート指導では、地域の一般指導者と専門指導者にて事前に共有したメソッドを軸に、メニュー作成を実施（MethodBASE活用）オンラインにて1週間の振り返りや悩み相談を実施
- ・**技術面に限らず、練習の取組み姿勢、成長する上で大切なことを指導**
子供たちも普段聞けないことが聞くことができた¹と高い満足度を得ることができた。



■MethodBASEの活用

- ・MethodBASEを活用、予め専門指導者（曾田氏）のナレッジを登録し、その中から練習の作成等ができ
地域の一般指導者の日々の業務の効率化に加え、指導に自信・勇気をもらえることができた。
- ・日々の振り返りが簡単にできるため、その時に気づいた子供たち一人一人に対するコメントを記録することで、事後のフィードバックも的確になり、子供たちとのコミュニケーションも向上した
（振り返りをするタイミングや時間の確保はルーティンの中で決める必要性も感じた）
- ・MethodBASEを活用することで練習記録や子供たちの評価を実施し、データとして変化（=成長）を見ることができた

苦勞した点
今後の改善ポイント

①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践 (サッカー,バドミントン)

■バドミントンの活動内容

■ハイブリッド指導

- ・リアル指導とリモート指導を毎週交互に実施 (A-bank北海道の専門指導者 三上氏が指導)
- ・事前に教員と子供たちとのコミュニケーションを図った (教員がバドミントン未経験者)
(この活動にて、専門指導者にて子供たちのレベルや求める内容を把握)
- ・**細かい動作に関しては、説明だけでは不十分のため事前に動画を撮影し共有を実施**
ただし、リモートだけでは分かりにくい部分はリアル指導日にチューニングを実施
- ・リモート指導では、専門指導者と子供たちでのオンライン1on1の工夫を実施
普段の練習の中で疑問や課題に感じていることを解消でき、子供たちも目標や意識を言語化することで、競技の理解を深め、日々の練習の姿勢に変化を感じた



苦労した点
今後の改善ポイント

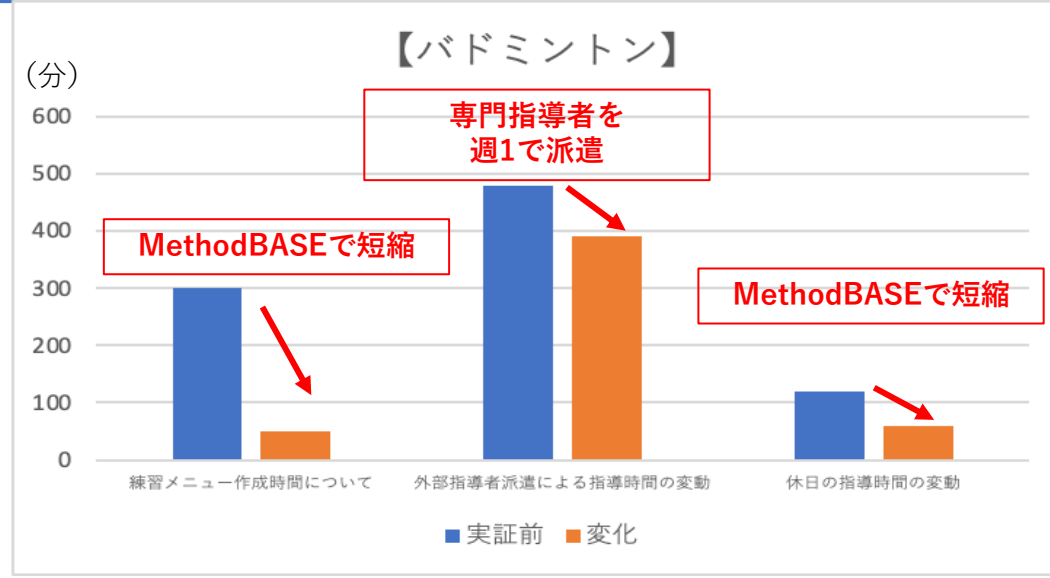
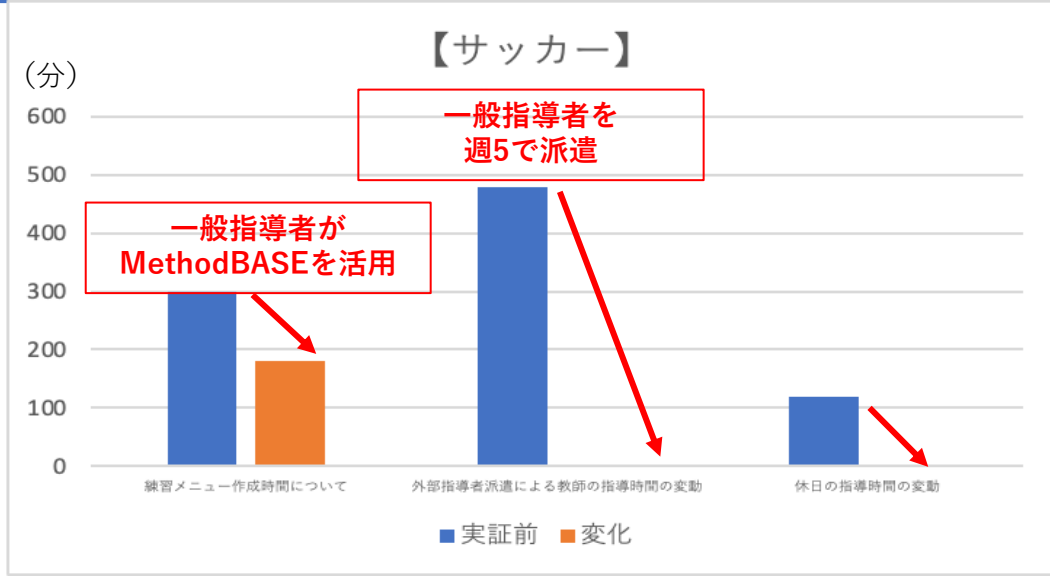
■MethodBASEの活用

- ・専門指導者にて、基本となる練習メニューを事前に提示 (目的や方法) することで、教員の準備における手間が軽減できた
- ・地域の一般指導者も途中参画したが、過去やってきたことと今後やることが明確の為スムーズに参画できた
- ・1月より、町内の近隣学校のバドミントン部からの要望もあり、即座に同じ環境を構築できた
遠隔地においても、三上氏の提供される練習メニューが共有され、目的や内容を共有することに活用

①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践 (サッカー,バドミントン)

■教員の負担軽減に貢献

- ・ **サッカーでは合計80%、バドミントンでは合計33%労働時間の負担軽減に貢献**
- ・ サッカーは、本実証以前より地域の一般指導者が参画。
大幅な負担軽減は当然のこと、地域の一般指導者の質の向上が、子供たちの満足度向上に繋がる
- ・ バドミントンは、競技未経験の教員が指導者であり、練習メニューを提示するサービスにより、メニューを検討する時間が短縮され、また、内容も専門指導者からの内容の為、質の向上に加え、子供たちの満足度向上に繋がる



一般指導者 (サッカー)

曾田メソッドが指導の観点の勉強になった。練習メニューをMethodBASEに登録することで、考える時間が減り、その分振り返りに時間を充てることができた。経験からのメニューを実践するだけでなく、そこに目的を持って指導ポイントを整理することができた。また、子供たち一人一人に対するフィードバックがデータとして残ることで、成長や課題が分析しやすくなった。全体として指導力の向上につながった。

教員 (バドミントン)

まず指導に来てくれたのが一番大きい。また、リアルだけでなくリモート（ミーティングやメニュー提示）で継続できたことが、私も勉強になるし、その間作業ができるし、何よりも子供たちのメチベーション向上にもつながっている。

①-A A-bank北海道の専門指導者による部活動の地域移行の実践（サッカー,バトミントン）

■取組み結果の考察

- ・ 専門指導者（元アスリートコーチ）は、一般指導者と比較し、指導ナレッジ（特に経験値）を豊富に保有するため、部活動の指導現場に入りこむことで、教員・子供にとってもモチベーション向上に繋がることを改めて確認。従来は、「スポーツ教室」のようなイベントで単一的な接点が一般的だが、リモートを駆使することで、継続的な接点作りができ、それも同時にモチベーション向上になることを発見。
- ・ 専門指導者による指導メニューの提供は競技経験のない教員にとって、練習メニューを考えたりする時間やストレスを軽減することができ、負担軽減に効果が出ることを確認
（※ただし気を付ける必要があるのは、メニュー提供だけでなく、現場のレベルや雰囲気把握する必要あり）
- ・ また、専門指導者の多様な指導メソッドを、一般指導者が活用できるICT環境を整備することで、一般指導者においても、専門指導者の考えと近い内容で指導ができ、多様なメニューを実践することができる。
- ・ ハイブリット指導の頻度（リアルとリモート）設計は、競技やレベルに応じて柔軟に設定ができると良い（今回は、月4回（2回はリアル、2回はリモート）の頻度で実施したが、リアル指導で提示されたテーマを取り組み、取り組む中で悩む時期にリモートが設定されたため、効率よく意欲的にトレーニングができた。）

(参考) 部活動の地域移行の実践の様子

リアル指導の風景 (コミュニケーションを取りながら進行・その場でメニュー確認)

リアル指導の風景 (初心者と中級者がおりメンバー構成をみてメニューを工夫)



リモート指導の風景 (成長する上で大切なことを指導)

一般指導者による子供たちへフィードバック (MethodBASEの画面を共有)

専門指導者と子供たちとの1on1 (リモート指導も実施)



(参考) 部活動の地域移行の実践 (実証参加者の声)

教員/地域の一般指導者

教員の負担軽減、新たな指導者の発掘



教員
(バドミントン)

休日だけでなく、 平日も負担が減りました

日々の練習メニューを組んでくださったので、平日に練習を検討する時間が短縮され、負荷が軽減されました。私は競技未経験なので日々練習メニューを考えることは負担に感じていました。

自分でも教えられると自信が つきました！



地域の一般指導者
(バドミントン)

私自身競技経験が浅く、「指導をする」ということに自信がなかったのですが、専門指導者から練習メニューが提供されたり、月2回のZoomMTGで相談ができるので、これであれば私でも指導に関わると感じました。

子供たち

子供たちの満足度向上



子供たち
(サッカー部)

専門指導者による指導は新鮮

普段何気なく実施している「止める・蹴る」の技術も専門指導者から目的や意図を学ぶことでチームメンバーの意識が高まりました。また新しい視点からの言葉が新鮮でわかりやすかったです。

練習が楽しくなりました！



子供たち
(バドミントン部)

バラエティに富んだ練習メニューを提供してもらえることで、自分の課題や、苦手な部分を克服するトレーニング方法も知れて、練習が楽しくなりました。Zoomでのミーティングでは技術以外の部分についても話を聞くことができ良かったです。

保護者

安心感向上



保護者

子供に変化が生まれました

夢を実現されたアスリートの方に指導して頂くことで、自宅でも子供自身が夢に向かい努力をしている姿が増えました。そういった変化に成長を感じました。

指導に安心感を感じます



保護者

専門指導者に見てもらえることで指導の質もあがったように感じ、子供をあずける親としても安心感が増しました。子供たちも楽しそうにスポーツに取り組んでいるように見えました。

(参考) ブカツコーチ星野教員からのアドバイス

概要	・ブカツコーチ星野明宏氏からの本PJに対するアドバイス
実施メンバー	・経済産業省、A-bank北海道、十勝うらほろ楽舎、NEC
実施場所	・リモートミーティング
実施内容	・本PJの概要共有 ・星野教員の体験談からのアドバイス ・ディスカッションの実施



PROFILE

星野明宏

(株)電通→筑波大大学院→静岡聖光学院中学校・高等学校。教頭、副校長を経て2019年に学校長に就き、数々のプロジェクトで学校改革を成し遂げた。教師となって静岡聖光学院を初の全国大会出場に導き、U17日本代表監督(2015、2016年)、U18日本代表監督(2017年)なども務めた。

参照元：<https://rugby-rp.com/2022/07/04/domestic/86224/3>

■部活動の地域移行に関するICTの利活用の取組みについて

- ・「指導者にスキルがない」という課題に対し、ICTを活用し専門指導者のメソッドを届けられる仕組みは良い取組み(指導者にスキルがないことで子供たちや保護者からの信頼度が変わる)
- ・社会ではICT活用は必須、「地域スポーツ＝現場指導」でなく、「地域スポーツ＝人間形成の学びの場」捉え、ICTスキルやプレゼン能力向上という考えになれば、新たな価値を創出できる。遠距離の地域でもできることとなる
- ・静岡聖光学園では、60-90分/週3回の練習時間で成績を出した(戦略・戦術は資料や動画を共有し効率化を図った)
- ・地域移行においては、スキルを教える人ではなく、ファシリテートできる人材がいればいいのかもしい予備校モデル(オンラインを軸として個人にフォーカスする)が参考になる

■ブカツコーチのアドバイスから得た気付き

- ・リアルな指導でない指導が難しいのでは?という前提で物事を考えていたが、社会においてICTの活用は一般的であり、人材育成の要素も必要となる部活動においても、ICTの活用によって、遠地でも指導の幅を広げられることを気付くことができた。

①-B 小・中を巻き込んだ9年間の一貫指導の実践

■実証の目的

■地域移行を見据え域内の小学校・中学校のスポーツ活動が連携し、指導者の質の向上・子供たちの人数不足・移動課題の解消に繋がるかを検証

概要	・浦幌中学校サッカー部と浦幌サッカー少年団（浦幌Jr.レッドデビルズ）による合同ハイブリッド指導の実施
実施メンバー	・A-bank北海道（ハイブリッド指導、トレーニングメニューの提供） ・浦幌中学校サッカー部（実証フィールド） ・浦幌サッカー少年団（実証フィールド） ・十勝うらほろ楽舎（中学校、少年団のサポート）
実施場所	・浦幌町総合スポーツセンター ・浦幌中学校教室 ・リモートサポート（Zoom、NECのPFを利用）
実施内容	・土日いずれかのリアル指導の実施 ・平日における指導プログラムの提供 ・共有ツールを活用しPDCAの共有 ・リアル&リモートでのPDCAサポート

■当初の課題

- ・1つの小学校、**中学校の単位では子供たちが少なく団体スポーツが成りたない**
- ・小学校は小学校、中学校は中学校と分断された環境で、指導の共有・引き継ぎがなされない

■活動内容 ※後掲

- ・専門指導者による小・中合同のハイブリッド指導の実施
- ・地域の一般指導者向けの学びの場・共有の場をつくる

■課題に対する検証ポイント

- ・小・中合同で連携することで人数の問題が解消され子供たちの満足度向上につながるか？
- ・指導者間での指導ポイントの理解・共有の深めることで指導の質が向上するか？
- ・小・中合同練習をする際に発生する移動（距離）の問題が、MethodBASEを用いたリモート指導で行うことで負担が減り、なおかつ質が落ちないか？



①-B 小・中を巻き込んだ9年間の一貫指導の実践

■専門指導者による小・中合同のハイブリッド指導の実施

- ・ 休日は専門指導者による指導実施 小・中の垣根を越えて実施。
中学生同様、小学生の子供たちにも元アスリートの指導にてモチベーション向上繋がる。
- ・ 平日からMethodBASEを使用して小・中同一のトレーニングメニューを実施
- ・ 振り返り、指導ポイントの共有を指導者間で実施 → 9年間の指導に統一の価値観を育む



■町内指導者向けの学びの場・共有の場をつくる

- ・ 少年団の指導者、中学校の指導者が参加し、実学だけでなく、座学で指導者の学びの場を実施。
「スポーツの価値」「スポーツを言語化する」「スポーツとメンタル」をテーマに講義・ディスカッションを行い一貫指導に向けた考え方の摺り合せと指導者の質の向上する機会を設けた。

■取組み結果と考察

- ・ 小・中合同練習は移動課題があり、頻度よく集まることは難しかったが、平日からMethodBASEを活用して同じメニューを実施することで指導者・子供たちにも共通の意識を育むことができることを発見（合同練習時にはスムーズに練習ができ、子供たちの満足度は向上した）
- ・ 「合同練習＝1カ所に集まる」という概念が、本実証を通してなくなった。
（移動課題がある地域では、MethodBASEを活用することでも効果的・効率的な練習は可能であることを発見）
- ・ 指導者の学びの場を作ったことや、小・中指導者が振り返り、指導ポイントの共有することで指導者の意識、質が向上した。
結果、子供たちにも変化が生まれ、子供たちのスポーツに取り組む姿勢も向上した。
（アイデアとして、指導者間の共有だけではなく、質が向上する仕掛け（ライセンス制度など）との連携があるとなお良い）

(参考) 小・中を巻き込んだ9年間の一貫指導の実践の様子

小・中合同リアル指導の風景

(子供たち同士でも理解ポイントを対話を重ねながら実地)



少・中指導者の学びの場づくりの風景

(実学と座学で実施)



小・中指導者間のトレーニングメニューと指導ポイントの共有



小学校指導者の声

指導者の意識が変わることで
子供たちの取り組む姿勢にも変化あり！



小学校指導者
(サッカー)

小・中合同で練習し、MethodBASEで情報共有することで指導者の意識統一が飛躍的に進んだ。結果、指導者全体の指導力が向上し、子供たちにも良い影響が及ぶ。子供たち同志が対話を重ね、課題改善に取り組む姿が印象的でした。年齢が離れていても、メニューに同じ理解ポイントがあることで、傾聴力や主張力など人間力が成長していくことを発見。

①-C 近隣エリアとの連携検討（上浦幌中学校でもICT活用とハイブリット指導を開始）

■実証の目的

■ 少子化により合同チームが促進される一方、近隣市町村・域内の学校同士も距離があるためICTの活用と質の高い合同練習を行うことで、子供たちのスポーツ環境の向上に繋げるため

概要	<ul style="list-style-type: none"> MethodBASEの活用による専門指導者が考案する練習メニュー提供と浦幌中学校と合同でリアル指導・オンライン指導の実施
実施メンバー	<ul style="list-style-type: none"> A-bank北海道（ハイブリッド指導、トレーニングメニューの提供） 上浦幌中学校（実証フィールド） 浦幌中学校（実証フィールド） 十勝うらほろ楽舎（中学校、少年団のサポート）
実施場所	<ul style="list-style-type: none"> 浦幌中学校体育館（リアル指導の時のみ参加） オンライン指導（Zoom、NECのPFを利用）
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> 土日いずれかのリアル指導の実施 平日における指導プログラムの提供 共有ツールを活用しPDCAの共有 リアル&リモートでのPDCAサポート

■当初の課題

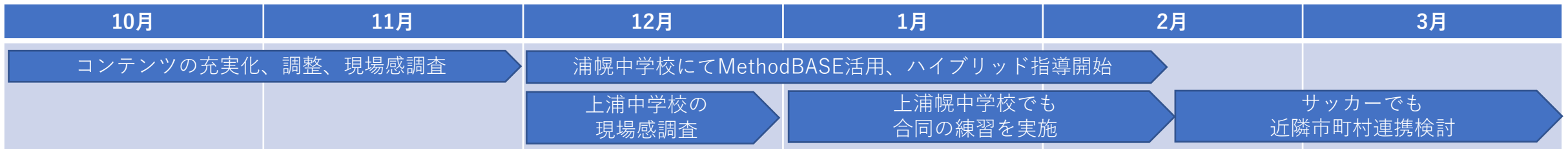
- 浦幌中学校と上浦幌中学校が同じ町にあるにも関わらず、**遠方地のため合同で練習することができない**（今までは未実施）
- 上浦幌中学校は部員数3名と少数で練習し、練習相手が偏ってしまう環境

■活動内容 ※後掲

- 専門指導者によるリアル指導（合同練習）を、浦幌中学校で実施【隔週実施】
- ICTを活用し、遠方地の子供たち同士の意識醸成・統一を行う（リモートによる合同練習）

■課題に対する検証ポイント

- MethodBASEを活用し、遠隔地での統一された練習を行う**ことで、同じ意識醸成ができるか
- 専門指導者によるリアル指導のみではあるが、**合同練習することで子供たちの満足度が向上するか？**



①-C 近隣エリアとの連携検討（上浦幌中学校でもICT活用とハイブリット指導を開始）

■専門指導者によるリアル指導（合同練習）（隔週）

- ・上浦幌中学校は3名の部員と少なく、指導者もバドミントン未経験者が担当している
- ・専門指導者によるリアル指導の際は、上浦幌中学校の子供たちも参加し浦幌中学校の子供たちと合同練習を実施

■ICTを活用し、遠方地の子供たち同士の意識醸成・統一を行う（リモート指導）

- ・片道約35分かかる学校同士のため別々の場所で共通の練習メニューを実施
- ・浦幌中学校と上浦幌中学校で統一した練習メニューをMethodBASE上で実施
- ・MethodBASEを活用して距離が離れて、練習を一緒にしなくても同様の意識醸成の実施
- ・専門指導者によるZoom利用したコミュニケーションを実施（練習時間の前半30~45分の利用）



←浦幌中学と上浦幌中では35分程度の距離

同じ指導者でリモート指導や練習メニューを提供



■取組み結果と考察

- ・今まで合同練習をしていなかった浦幌中と上浦幌中の連携が始まり、一緒に練習できる仲間が増加したことで、違う対戦相手と取り組めることが嬉しいという子供たちの声があった。（子供たちのスポーツ環境の充実に繋がる）
- ・子供たちにとって、ICTも活用しながら「専門指導者から学べること」と「一緒にプレーできる仲間が増えること」はモチベーション向上に繋がることを確認。
- ・一方、ICTの活用で、リアル指導（合同練習）の数は隔週と減少したが、それでも送迎不可の子供がいたため、保護者のみに頼らない送迎の検討が必要
- ・ICTの活用と隔週での合同練習の実施による他地域連携の可能性が見出せたため、サッカー部で本別中との連携を打診し今後の可能性探る。

②-A うらほろ未来のブカツ協議会を発足し、地域移行の目指す姿を協議

■実証の目的

■主要ステークホルダーを中心とした未来のブカツ協議会を発足し、域内での課題共有、未来図の検討による意識醸成により地域移行がスムーズに進むかを検証

概要	・うらほろ未来のブカツ協議会の実施
実施メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・A-bank北海道 ・NEC ・浦幌町教育委員会 ・うらほろスタイルサポート ・十勝うらほろ楽舎
実施場所	<ul style="list-style-type: none"> ・リモート ・浦幌町教育委員会2F会議室
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・下記テーマを目的とした会議の実施 浦幌で目指す子供・大人にとって豊かなスポーツ・文化活動の環境を、まずは教育委員会・楽舎・NEC・A-bank 北海道で議論し、課題の抽出を行い、未来の受け皿を描く

■課題

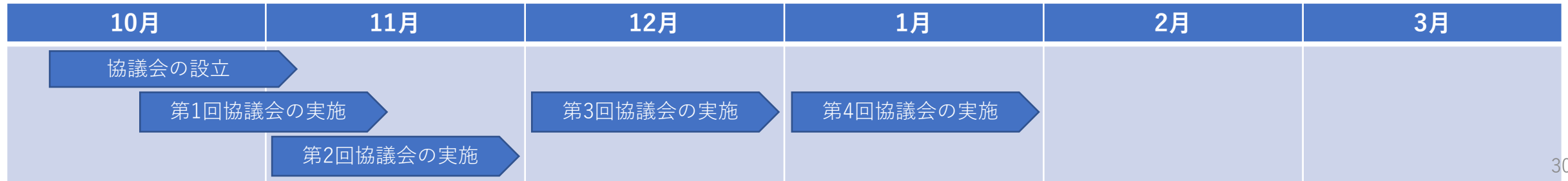
- ・部活動の地域移行は必要と考えているが何から着手すればよいか分からず前進しない。
- ・地域で支えることになった場合、どう自走していくか未確定

■活動内容

- ・A-bank北海道、NEC、浦幌町教育委員会、うらほろスタイルサポート、十勝うらほろ楽舎で会議を実施（経済産業省、BCGよりアドバイス）
- ・前提のすり合わせと、課題共有・計4回の協議会の実施。
- ・ありたい姿（未来図）の検討を行いイメージ図を作成

■検証ポイント

- ・ステークホルダーが共通認識を持てるありたい姿が描けるか。
- ・収益事業の可能性（マラソン、食イベントなど）
- ・近隣市町村連携の可能性（上浦幌など）



②-A うらほろ未来のブカツ協議会の活動①

<第1回協議会の実施> 10/11

実施目的	未来のブカツ協議会メンバーのキックオフ 町内ステークホルダーとの意見交換より実態の確認
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会（高橋・原口） ・NEC（大塚・小久保） ・A-bank北海道（曾田・木村） ・十勝うらほろ楽舎（汰木・円子・越膳・上田）
実施場所	・浦幌町域内
実施内容	<p>（町内関係者の部活動の地域移行に関する課題意識をヒアリング）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水澤町長…教員の負担軽減。そして子供たちに良い影響が出るよう進めたい ・教育委員会…色々な課題があり一足飛びでは解決できないが、取り組む必要があると考えている。今回をきっかけに進んでいきたい。 ・教員…競技経験がなく、工夫の仕方が分からず、正解かもわからない。今回の取組みは期待しているし、子供たちにとっても有益だと思う。



<第2回協議会の実施> 11/22

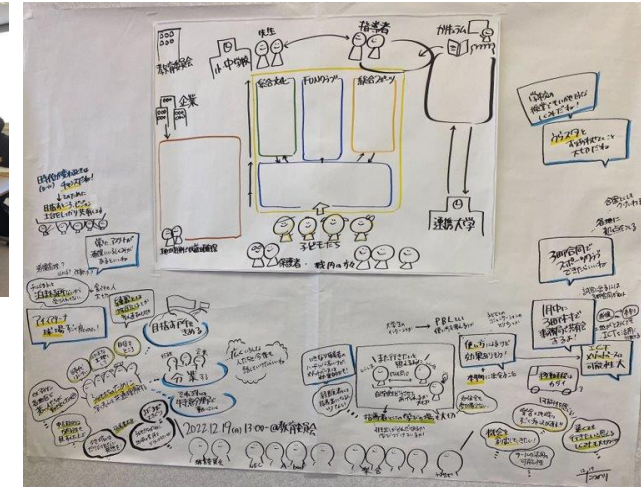
実施目的	主要メンバーでの今後の実証計画の確認・現状課題の共有
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会（高橋・原口） ・NEC（大塚・小久保） ・A-bank北海道（曾田・木村） ・十勝うらほろ楽舎（汰木・円子・越膳）
実施場所	・オンラインミーティング
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・実施計画の確認 ・各種ステークホルダーとの調整内容の確認



②-A うらほろ未来のブカツ協議会の活動②

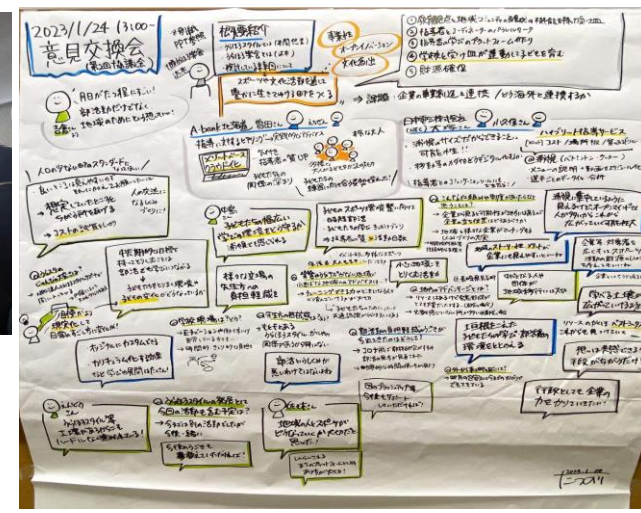
<第3回協議会の実施> 12/19

実施目的	浦幌で目指す子供・大人にとって豊かなスポーツ・文化活動の環境を、まずは教育委員会・楽舎・NEC・A-bank 北海道で議論し、課題の抽出を行い、未来の受け皿を描く
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会 (高橋・原口) ・NEC (大塚) ・A-bank北海道 (曾田・木村) ・十勝うらほろ楽舎 (汰木・円子・越膳・上田) ・うらほろスタイルサポート (本間悠・本間里)
実施場所	浦幌町教育委員会会議室
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・前提擦り合わせ 課題意識の共有とありがたい姿のプレスト ・アンケートの共有 ・グラフィックデザインを用いて未来図を描く ※次回、課題抽出と具体的な未来図の落とし込み

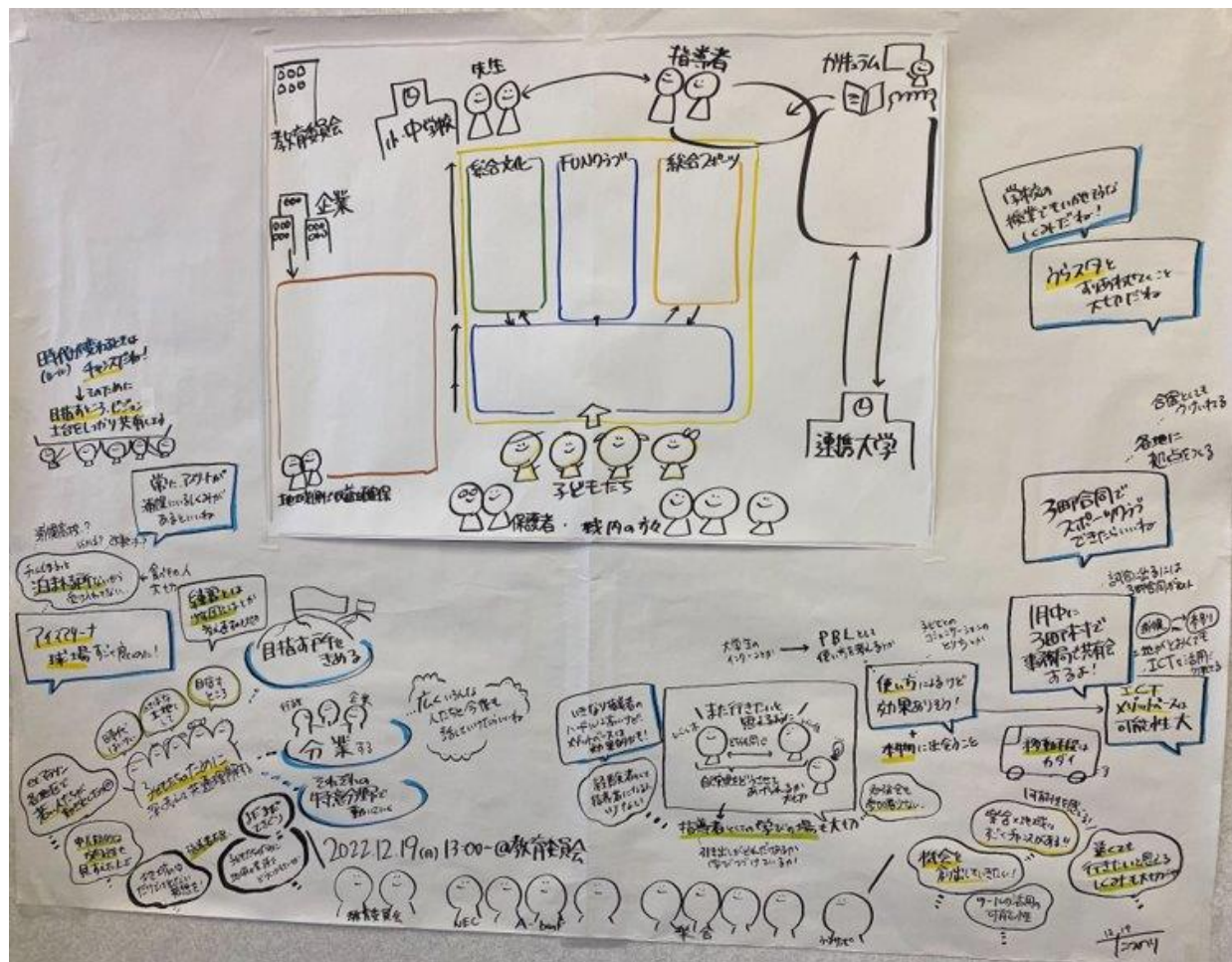


<第4回協議会の実施> 1/24

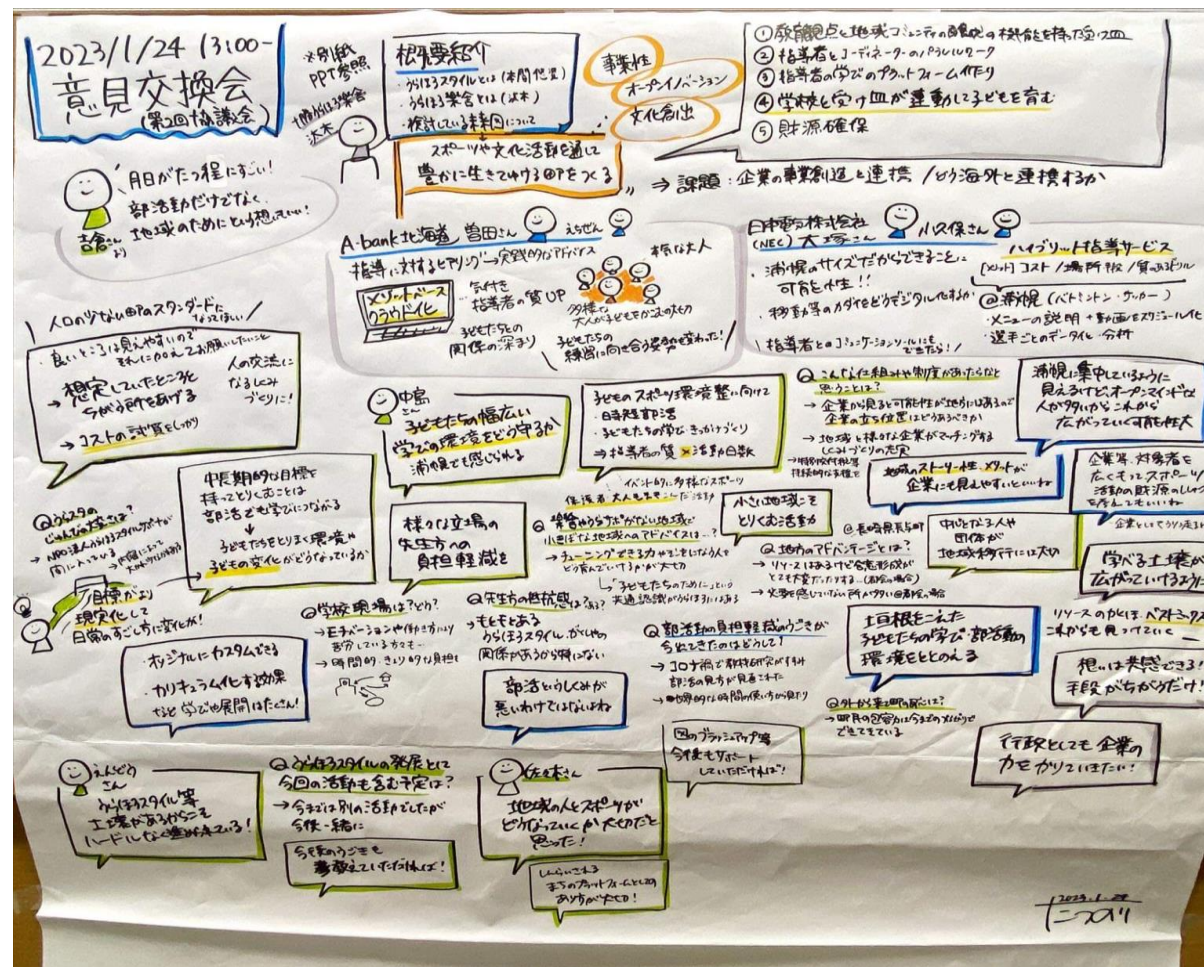
実施目的	浦幌で目指す子供・大人にとって豊かなスポーツ・文化活動の環境を、まずは教育委員会・楽舎・NEC・A-bank で議論し、課題の抽出を行い、未来の受け皿を描く
メンバー	<ul style="list-style-type: none"> ・経済産業省 (吉倉・中島) ・教育委員会 (高橋・原口) ・NEC (大塚・小久保) ・A-bank北海道 (曾田・木村) ・十勝うらほろ楽舎 (汰木・円子・越膳・上田) ・うらほろスタイルサポート (本間悠・本間里)
実施場所	浦幌町教育委員会会議室
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・取り組みの進捗共有 ・課題抽出と具体的な未来図の落とし込み



グラフィックデザインを用いて未来図を描く



第3回協議会



第4回協議会

②-A うらほろ未来のブカツ協議会での主な検討結果

- うらほろ未来のブカツ協議会では子供たちがスポーツを選択できる環境を整えるために、近隣市町村との縦（年代）、横（地域間）連携を見据えた、将来モデル検討

検討内容

■主要ステークホルダーを中心に、あるべき姿の徹底議論と共通認識を持つ（イメージ化）※右記

●子供たちが選択できるスポーツ・文化活動の環境を整える

- ・現状の部活動を維持する考えではなく、子供たちが極力自由に好きなスポーツ/文化活動を選択できる環境づくり

●幼保～中学校までの視点で設計（縦の連携）

- ・中学校の部活動の地域移行だけの目線ではなく、幼保段階からスポーツ/文化活動が好きになる楽しむ環境を設計する

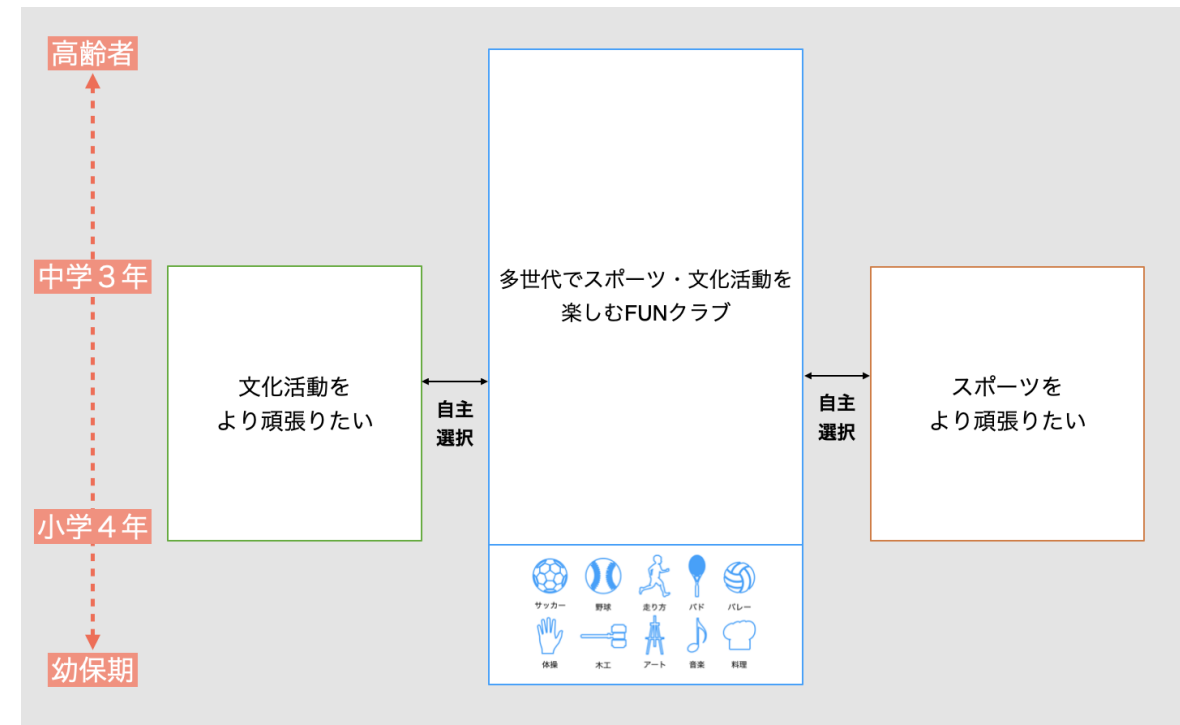
●近隣市町村との連携の検討（横の連携）

- ・子供の人数、練習施設などを考慮した場合、浦幌町のみで考えるのではなく、他町村を巻き込んだ設計をすることを検討

●「競技性を求める活動」と「FUN要素が高い活動」を設計

- ・大会で結果を残すことを目的とするのではなく、人間育成や楽しく身体を動かすためのクラブも設計する

将来モデル検討案（近隣4エリアの学校の連携）



②-A うらほろ未来のブカツ協議会での主なポイント

■協議会を進行する上での重要なポイント

①学校現場との丁寧なすり合わせ

- ・ 教員とは合意ができていたものの、学校現場全体からすると今後どのように進むのかイメージができないと活動しにくく合意に時間を要したため、各ステークホルダーへの丁寧なすり合わせが重要
- ・ 教員の働き方改革も重要ではあるが、「子供たちにとって最善の環境が何か？」を一番目の論点におき、あるべき姿を描くことで、各組織の既存の枠を超え、同じ目線で活動を推進することが重要

②自治体（浦幌町として）の進め方

- ・ 行政と民間のスピード感の違いで相互理解の不一致が生じる可能性があるためロードマップを共有し、丁寧にステップを踏んで議論することが重要
- ・ 十勝うらほろ楽舎のようなコーディネータが丁寧にステークホルダー調整を行うことで一歩ずつ進行することが重要

③継続的な活動の実施

- ・ 単純な部活動の地域移行という論点に留まらず、スポーツ×学習といった地域と学校がより一層連携することが重要
住民をはじめとしたステークホルダーとの合意形成や協力も得やすい環境作りが重要
- ・ 受益者負担と企業版ふるさと納税の活用だけでなく、うらほろマラソン等の地域と連携したイベントでの収益を本活動に充当するスキームを構築することが重要

④近隣との連携方法

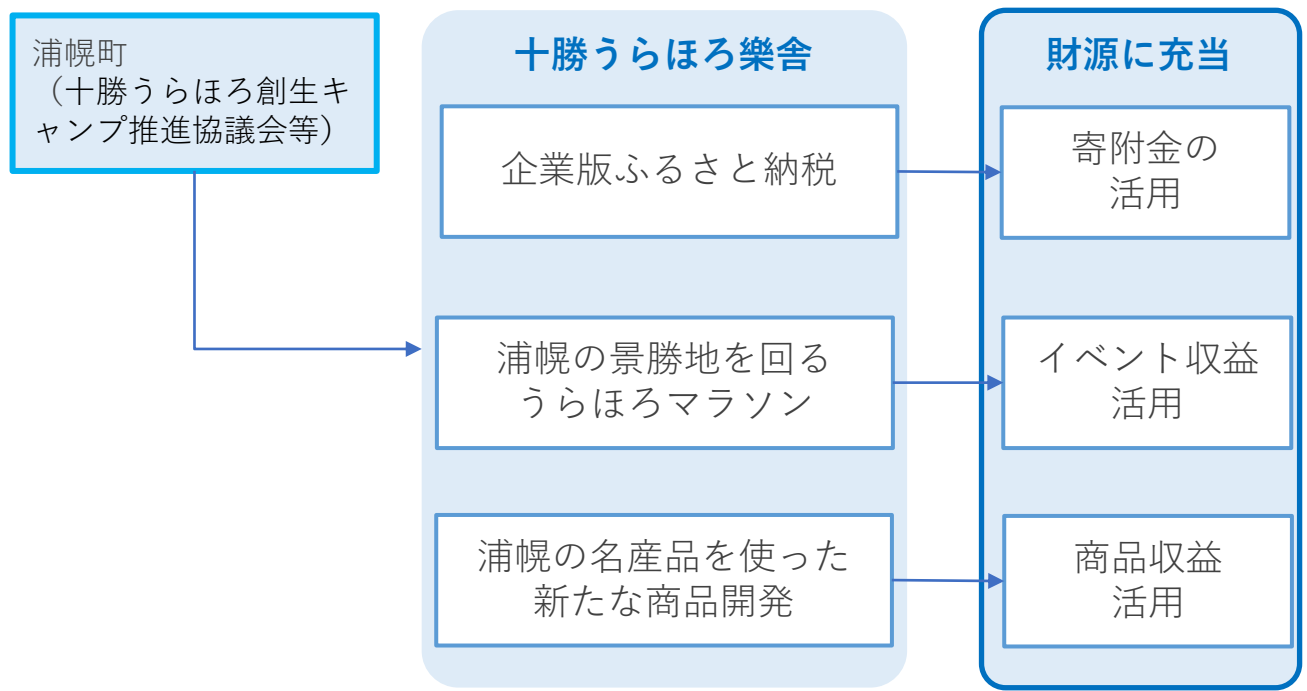
- ・ 移動問題などが一番のネックであるのは事実だが、ICTを活用した他地域連携の可能性を発見
- ・ 平日はICTの活用で同じ活動を行い、週末の合同練習のみ1拠点に集まって実施することで、移動負担を軽減しつつ、トレーニング面での意識の統一はできる可能性がある（※P23：ブカツコーチ星野教員からのアドバイスも参考）

②-B 収益事業の展開 全体概要

■実証の目的

■コーディネータの役割となる十勝うらほろ楽舎が主となり、地域アセットを活用した収益事業の展開により、自主財源の確保、地域移行の財源に充当できるか検証を実施

地域と連携した収益事業のスキーム



■課題

- ・地域移行を実現する上で、子供たちの数が少ないため受益者負担のみの事業モデルでは継続性が困難

■活動内容

- ・企業版ふるさと納税の活用
- ・浦幌の観光資源を活用したイベントによる収益モデル化
- ・浦幌の名産品を活用した商品開発による収益モデル化

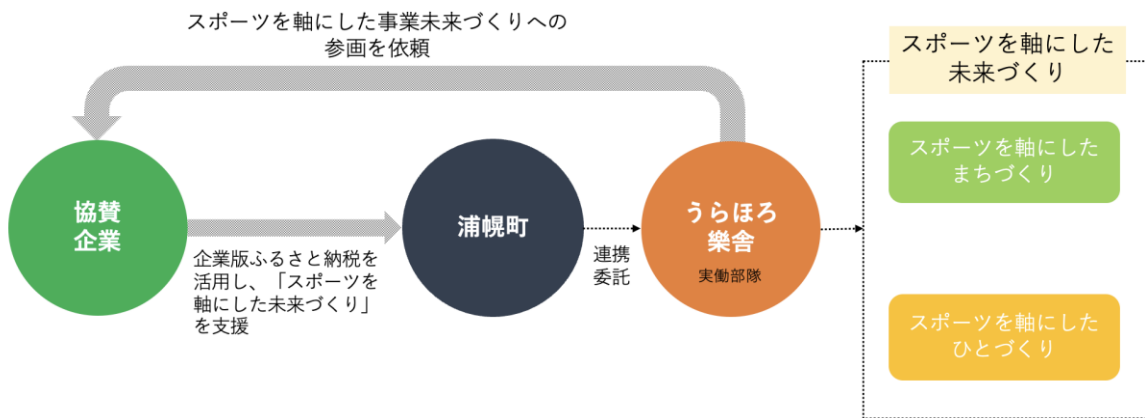
■検証ポイント

- ・本テーマによる企業版ふるさと納税の寄附金をスポーツの取組みへ活用する収益モデルの実現
- ・イベントの組成による収益モデルの実現
- ・商品企画の企画・開発による収益モデルの実現

10月	11月	12月	1月	2月	3月
企業版ふるさと納税企画			営業活動の実施		
イベント企画		イベント実施	うらほろマラソン企画		
			商品開発		発売予定

②-B 収益事業の展開 企業版ふるさと納税の活用

■企業版ふるさと納税を活用して、よりスポーツ環境を充実させていく



浦幌町（十勝うらほろ創生キャンプ推進協議会）と十勝うらほろ楽舎が連携して「スポーツを軸にした未来づくり」を実施。そこに、十勝うらほろ楽舎が企業様の参画しやすい機会を提案・依頼する

■概要

・自治体（十勝うらほろ創生キャンプ推進協議会）と連携し、企業版ふるさと納税を活用しながら「スポーツを軸にしたひと／まちづくり」を実施する

■今年度の状況

・うらほろマラソンなどを含むスポーツを軸にしたひと／まちづくりに企業版ふるさと納税を活用した寄付のご提案
（活動日程）1～3月で9社営業
・2023年5月までにスポンサー費で3,000万円の獲得を目指す

（昨年実績：参考）
うらほろマラソンなどを含むスポーツを軸にしたひと／まちづくりに企業版ふるさと納税を活用し1,000万円の寄附の実績あり

■試算イメージ

・企業へのお願いとしては、スポーツを軸にした未来づくりに共感した企業様をうらほろマラソンなどの取組み時に企業ロゴを掲載させていただく
・寄附金額の50%をスポーツを軸にした人／まちづくりの費用として使用する

■取組み結果の考察

- ・自治体と楽舎・企業が連携した上記スキームを作っていくことが重要である
- ・コーディネーターがいて、企業が参画しやすい機会のご提案を行なっていくことが重要である
- ・関心ある企業は、SDGsや地域貢献・スポーツを軸にしたひと／まちづくりの先駆的モデルを作っていくことへ共感
- ・課題は、企業とのマッチングが少ないため、接点をつくることに苦労をする
- ・来年度はこのスキームを活用して、自走できる仕組みを確立する

(参考) 収益事業の展開 企業版ふるさと納税の活用



参画いただいた企業様のロゴを使用した
バックパネルの作成
※上記イメージ※



参画いただいた企業様のサンプル配布
※上記イメージ※

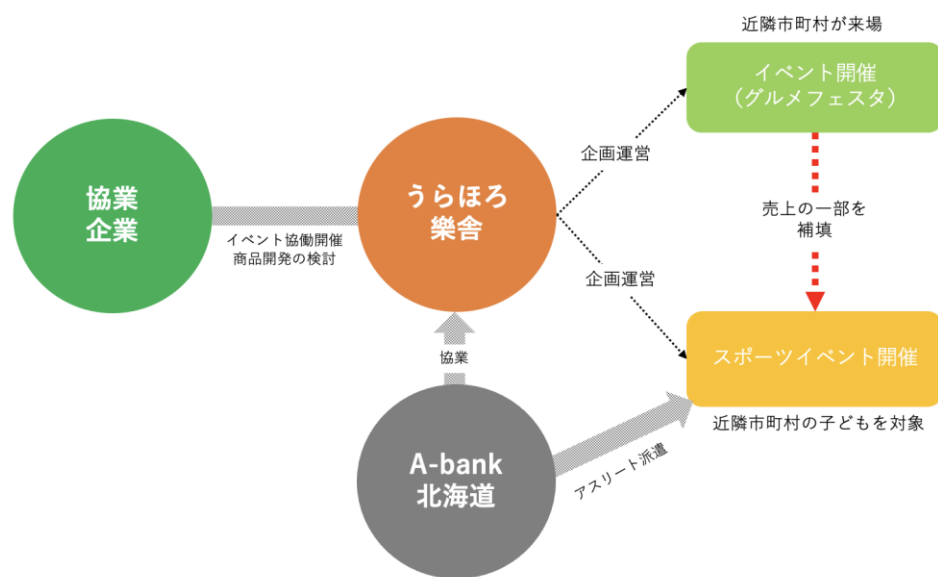


参画いただいた企業様のロゴ入り
Tシャツの作成 (予定)

②-C 収益事業の展開 商品開発（イベント）

■実証の目的

- イベント開催を企業と連携することで、今後の協働のための入口とする
- 「稼ぐ」→「子供たちの学びへ捻出」する見える化させることで町全体で「スポーツ環境を整えていくこと」への意識を醸成するため



■課題意識

- ・ 部活動の地域移行やスポーツ環境を整えていくことへの町民の意識が高めるため、イベントを介して意識醸成をする必要がある
- ・ 企業やアスリートと連携する中で、具体的な事業性やメリット・可能性などが見えなかったため、新たな協働のカタチの事例をつくるため

■概要

- ・ 2022年12月17-18日に浦幌町中央公民館にて実施
- ・ 浦幌産の行者ニンニクの活用や十勝産の全粒粉小麦を活用したラーメンを販売
- ・ 売上の一部を活用し、同日にA-bank北海道と協働してスポーツイベント（サッカー教室と講演会）を実施

■結果

- ・ 食のイベントは、約468名来場（約850食を販売）
- ・ スポーツイベントは、（教室）子供20名（講演会）保護者52名が参加
- ・ イベントの売上の一部でサッカー教室を実施

■取組み結果の考察

- ・ 企業と連携を深めるための施策として、イベントを開催することは非常に効果的であった
- ・ その日のイベントで飲食の売上の一部を子供たちのスポーツイベント（プロサッカー選手によるアスリート教室）に活用することで受益者負担だけに頼らない仕組みの創出への町民の意識醸成に繋がる施策になることがわかった。
- ・ 以後1年間に数回継続していくことで、関わりたい／一緒に取り組みたいという意識を町民・企業・アスリートに感じてもらう取り組みに仕上げる必要がある

(参考) 収益事業の展開 商品開発 (イベント)

Curry SAVOY うらほろグルメフェスタ
2022
浦幌町中央公民館
12/17 10:30-19:00
12/18 10:30-19:00
015-576-3772

チラシを配布

浦幌食材で「フェスタ」
17・18日 カレーとラーメン販売
浦幌町は食育のまちとして知られ、産物も豊富なまちです。今回は、浦幌産の食材を使った「フェスタ」を開催します。カレーとラーメンの販売だけでなく、地元産の食材を使った「フェスタ」を開催します。

新聞掲載を配布



当日の会場の様子 (グルメフェスタ)



当日の会場の様子 (スポーツイベント)
当日は、現役Jリーガーが子供たちを指導

②-D 収益事業の展開 商品開発（グッズ販売）

■実証の目的

■多額な受益者負担、町の財源に頼りすぎない仕組みをつくるために、町の強みである一次産品に付加価値をつけて販売出来る商品をつくり、利益の一部をスポーツ/文化活動環境に捻出するため



■課題意識

・部活動の地域移行やスポーツ環境を整えていくことへの町民の意識を高めるため、商品開発を介して意識醸成と利益の一部を活動に還元する仕組みをつくる必要がある

■概要

・浦幌町の強みは農林水産業があり、豊富な一次産品があるが商品化などはまだ数が少ないため、付加価値をつけて販売できる商品をつくる
 ・商品の販売実績の一部を部活動の地域移行やスポーツ環境を整えていくための資金に充当する
 （事例）
 ・浦幌町の小豆と牛乳を使ったあんバターの販売実績あり

■結果

・参加企業Aと行者ニンニクを活用した商品を開発へ（3月発売予定）
 ・参加企業Bと全粒粉を活用した麺と行者ニンニクのスパイスを共同開発を検討開始

■取組み結果の考察

- ・一次産業者が多い浦幌町では地場産品を活用した商品づくりは、コミュニケーションが取れるきっかけにもなるため町を巻き込む要素としては効果あり
- ・商品を共同開発している企業に対しうらほろマラソンの協賛提案という副次効果も生むことができた
- ・浦幌町の地場産品を活用した商品をつくることで、受益者負担だけに頼らない仕組みの創出の意識醸成に繋がるため、今後も地域の方々と協働しながら検討していく

②-E 域内で活躍するスタッフの確保（マネジメント/指導者）

■実証の目的

- 今後の地域移行を見据え、域内エリアで生活をする一般指導者の確保が重要。
そのため、町内で複数の仕事を掛け持ちする働き方のモデルケースが有効かを検証する。



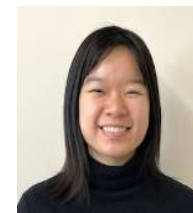
■ パラレルワークを通して 持続可能な指導への関わり （井上さん 本業：飲食店）

（現在の働き方）

- ・ サッカー指導者として浦幌町にUターンをする決断するも、指導者の収入だけで生計を立てることは難しく、町内で複数の仕事を掛け持ちする働き方を実施中。（飲食店・コンビニ・牧場スタッフとして生計を立てる パラレルワークを実現）

（活動内容）

- ・ サッカー指導の時間軸に合わせ、指導支援を実施（今回はボランティア）
指導時間外でも、日中の仕事もあり両立できる感触を得る
=> **地域移行の際は、兼業をしながら、指導者を軸として関与希望**



■ 指導未経験者による MethodBASEを活用した指導 （伊場さん 本業：十勝うらほろ楽舎）

（現在の働き方）

- ・ 十勝うらほろ楽舎の広報を担当（浦幌町育ち）

（活動内容）

- ・ バドミントンの競技経験が一定期間あるだけであったが、子供たちの環境向上のために参画。MethodBASEでメニューが提示されているため、コーチでなく、ファシリテートの立場で教員/子供たちと共有しながら活動を実施
=> **指導案からすべて考えるとなると参画判断はできなかったが、専門指導者からメニューが提供されるので一緒に学ぶスタンスで継続的な活動ができそう**

■取組み結果の考察

- ・ 域内にいる潜在的な人材に対し「活躍できる場所/時間」と「活躍を支援するツール」があることで新たな人材確保の可能性あることを発見
- ・ 部活動現場と並走できるファシリテーターも重要であり、指導者不足の一助になる可能性がある（ノウハウを共有できるMethodBASEはツールとして有効）
- ・ 町内の企業や一次産業などと協同し、域内でパラレルワークを受け入れる土壌の構築するよう域内の企業と連携していく

②-F するに限らず、スポーツをささえる参加者の増加アプローチの検討

■実証の目的

■ スポーツ×〇〇〇の活動を通じ、スポーツを支えるステークホルダーの増加を図る



宮川 順子 (浦幌町在住)

(社) MIIKU日本味育協会 代表理事
(株) ユーキャン 食部門主任講師
「宮川順子のおいしさキッチン」主宰

長男の化学物質アレルギーを機に添加物を使わない手作り家庭料理に専念。経験を活かし料理教室を開講。食分野の各種資格を取得後、安心安全で健康を守る食の普及を目指し、味覚学をベースとした食育を実践するための協会を設立。現在は「おいしい!にはワケがある」をキーワードにセミナー及びプロ、アマチュアを問わない調理技術講座等で講師を務める他、テキスト執筆、社員研修、商品開発、食による地域活性化なども手掛ける。



■課題

- ・ 地域移行を進める上で、ステークホルダーの意識醸成が必要である

■活動内容

- ・ 保護者をメイン対象にスポーツと健康・栄養を掛け合わせる活動を実施
- ・ 2022年10月9日（日）に浦幌中学校にてサッカーのアスリート教室と合わせて、子供とその保護者に対して食育の講義を実施
- ・ 講師は(社) MIIKU日本味育教会の代表理事：宮川順子さん
- ・ 参加した子供たちと保護者を対象に、子供の身体づくりに必要な栄養素、手軽にできるレシピの紹介
- ・ 宮川さん考案レシピの弁当を販売（1,100円）

■実施結果

- ・ 子供たち、大人合わせて52名が参加
- ・ 特に保護者からの口コミがよく、継続実施の希望多数
- ・ イベントのセットにしたため参加者全員がお弁当を購入

■取組み結果と考察

- ・ 「スポーツ」に「食・栄養・レシピ」を掛けることで、保護者を対象まで広げることができ、反応も良好でありニーズを発見
- ・ 宮川氏にとっても、子供たちの健康維持という観点で良い取組みであると評価をいただき、今後も継続実施していく
- ・ 他企業（例：町内企業「森永乳業様」等）との子供たちの食育の連携を図り、より活動を深化できるよう検討

③-A ハイブリッド指導の実践によるコスト・時間・機能面の検証

■実証の目的

■ MethodBASEを用いたハイブリッド指導を実践することで現有リソース内で部活動へのサービス事業の可能性（コスト、時間、機能面）を見出すことができるか検証する

概要	・ハイブリッド指導におけるICT環境整備
実施メンバー	・A-bank北海道 （専門指導者 サッカー指導者：曾田氏/ バドミントン指導者：三上氏） ・NEC（MethodBASEの提供）
実施場所	・浦幌中学体育館・リモートにて実施
実施内容	・指導ノウハウの体系化整理 ・指導ノウハウのコンテンツ化 ・平日における指導プログラムの提供 ・リモート指導の方法の工夫 ・リアル＆リモートでのPDCAサポート

■当初の課題

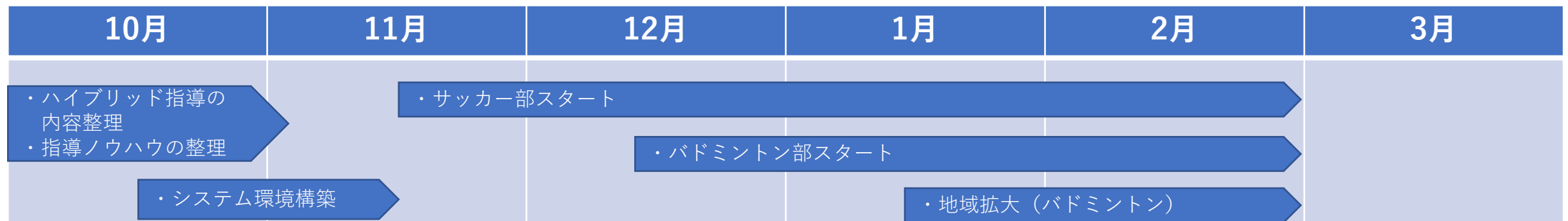
- ・部活動の地域移行の流れに伴い問合せが増えてきているが、リソースに限りがある。事業拡大が難しい。

■活動内容 ※後掲

- ・リモート指導のメニュー開発（指導ノウハウのコンテンツ化）
- ・リモート指導（指導プログラムの提供）
- ・リアル指導の実施（月4回から月2回に削減）

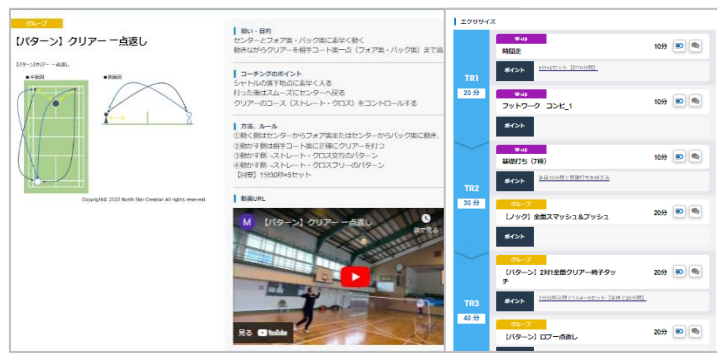
■課題に対する検証ポイント

- ・MethodBASEを活用し現有リソースでの部活動へのサービス事業の可能性を見出すことができるか。



③-A ハイブリッド指導の実践によるコスト・時間・機能面の検証

トレーニングコンテンツ



カレンダーよりトレーニングメニューを提案



リアル指導の実施



■リモート指導のメニュー開発（指導ノウハウのコンテンツ化）

- NECサービスのMethodBASEを利用し、部活動の利用シーンを想定したトレーニングの体系化、紐づくトレーニングメニューを登録
- 動画コンテンツを一から揃えるのには時間が掛かるため、まずはテキストやイメージ図を準備し、リアル指導と合わせて動画を準備（スマホでの撮影）
- リモート指導の内容メニュー化
 - ・Zoom利用したコミュニケーション
 - ・練習時間の前半30~45分の利用（その後に現場での練習ができるよう設計）
 - ・内容の工夫（課題/宿題設定、1 on 1、オンラインLIVEチェックなど）
- リモート指導の内容は、事前内容設定の工夫が必要（カリキュラム化や希望メニューの選択式など）

苦労した点
今後の改善ポイント

■リモート指導プログラムの提供

- A-bank北海道の専門指導者から休日、平日の指導プログラムをMethodBASEで提供
- 教員や地域の一般指導者が利用できたため、実践においても問題なく利用できることを確認**
- また複数チームの共有機能を用いることで、浦幌町で作ったコンテンツを他地域で利用できるため、他地域へのスムーズにサービス提供ができる事を確認

■リアル指導の実施（月4回から月2回に削減）

- リモート指導との連動させ、平日提供している指導プログラムによる子供たちの変化を確認
- 子供たちの成長度合いを確認し、次回提供するリモート指導プログラムに反映
- リモートでは伝えきれない、練習の取組み姿勢、成長する上で大切なことを指導

③-A ハイブリッド指導の実践によるコスト・時間・機能面の検証

コスト・時間の検証

実施内容	期待効果	検証結果
ハイブリッド指導実施 リアル指導 月2回/ オンライン指導月2回	部活動支援事業者： 人件費（指導コスト） 移動コスト/ 移動時間 削減	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>指導コスト： 30%削減</p> </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>移動コスト 移動時間： 45%削減</p> </div> <p>■すべてリアル指導の場合のコスト： リアル 20回×4万円 = 80 万円</p> <p>■ハイブリッドの指導コスト： リアル 11回×4万円+オンライン 9回×1.5 万円= 57.5 万円</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>■すべてリアル指導の場合の移動コスト/移動時間： リアル 20回×1.5万円（札幌～浦幌）= 30 万円 リアル 20回×7時間（札幌～浦幌）= 140時間</p> <p>■ハイブリッド指導の移動コスト/移動時間： リアル 11回×1.5万円（札幌～浦幌）= 16.5万円 リアル 11回×7時間（札幌～浦幌）= 77時間</p>

■取組み結果の考察

- ・ハイブリッド指導は都市部と距離があり、移動手段の課題が顕著な地域でより効果を発揮できることを確認
- ・教員の負担も軽減しつつ、都市部と変わらず、専門性の高い指導を受けることで保護者、子供たちへの安心感にもつながる効果あり
→サッカーでは合計80%、バドミントンでは合計33%労働時間の教員の負担軽減に貢献（P19を参照）
- ・移動時間が短縮することで、他エリア展開の可能性あり（=収益増にも貢献）

③-A ハイブリッド指導の実践によるコスト・時間・機能面の検証

NEC/MethodBASE 機能の検証①

■スケジュールリング機能

◎大変有効に機能した

■①-A等での検証結果の様に、専門指導者による指導案の提示サービスの機能は十分活用できることを確認

専門指導者より、カレンダーに推奨練習メニューを登録



一日の練習の流れを提示
練習内容、時間、ポイントが記載



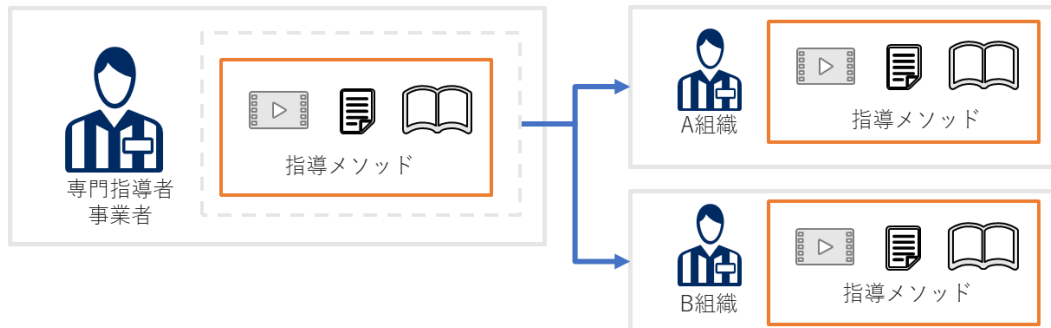
指導メニュー（詳細内容）
写真、動画、ポイントメモなどを確認



■指導コンテンツ配布

◎大変有効に機能した

■同一指導コンテンツを複数エリア（本実証では3エリアで実施）に配布できる機能を活用し合同練習をしている地域に同じメニューを展開



本機能を活用し、同一の指導を行うことで、
合同チームを組んで試合に出場する組織でも、
平日一カ所に集まらずとも練習メニューや考えの共有が可能

③-A ハイブリッド指導の実践によるコスト・時間・機能面の検証

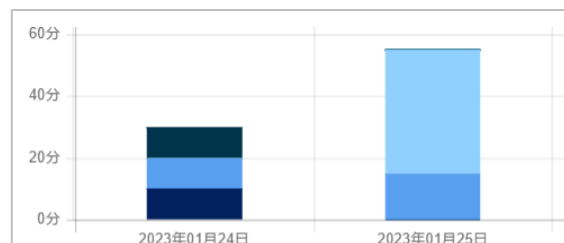
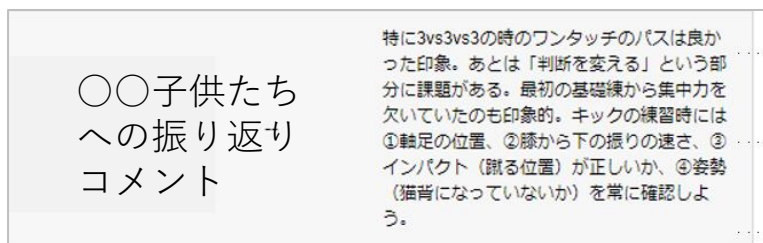
NEC/MethodBASE 機能の検証②

■ 振り返り機能

△ 一部改良が必要

- 子供たちひとりひとりへのコメントや振り返りができる機能はあるが、教員が記入した振り返りでは支援している事業者側に細かな子供たちの状態や提供したメニューによってどのような変化が生まれたのかが伝わりづらい部分がある

(サンプル) 指導者から選手一人ひとりへのフィードバックコメントや練習の記録確認グラフ



■ 個人(子供たち)評価機能

○ 有効に機能した

- 子供たちの評価シート(テクニカル・実行力評価)を登録し評価実施。



- ・今回は1度の評価であったが、3か月に1回や半年に1回実施することで成長の過程が見れることは有益。
- ・本シートを印刷し、子供たちや保護者に提供することで、事業者の部活動サービスに負荷価値をつけることが可能とわかる

■ 取組み結果の考察

- ・ MethodBASEを活用しチームの状況を理解した上で、平日・休日の指導メニューを配布することは、教員や一般指導者の理解が進み、十分指導が成り立つこと、部活動支援事業者のサービスになることを実証。
- ・ 一方、MethodBASEの振り返り機能のみでは、状況・変化が伝わり切れず、定期的なリアル指導による現場確認は必要。
- ・ 今後、展開先が増えた場合、事業者側の負担を考慮し、一括で各展開先のスケジュールを作る機能が必要(現状は個別に作成)

③-B 別エリアでの事象展開の可能性（札幌旭丘高校）

■実証の目的

- 限りあるリソースで部活動指導事業を複数地域で展開する可能性を見出すため。
- 浦幌町と並行し札幌市内の高校でもMethodBASEを活用したハイブリッド指導を実施することによる専門指導者の負荷、時間、コスト面の検証を行うため。



札幌市中央区に位置する市立高等学校。男女合わせて55名の部員が在籍。教員4名全員がバドミントン経験なし。

■実施内容

- ・リアル指導5回リモート指導4回のハイブリッド指導とMethodBASEを活用したトレーニングメニューの提供を行った
- ・札幌市教育委員会市立高校担当者と校長の協力により本実証のモデルケースとして実施
- ・指導時にはコーディネーターが同席し、教員や部員との各種調整、レクチャーを行った
- ・ハイブリッド指導による人件費、移動に係る時間・コストの効率化を検証した

■取組み結果の考察

- ・1人の専門指導者が他業務と並行し4部（浦幌中、上浦幌中、旭丘高校男女）を担当する負荷は、リモート指導導入により移動時間とコストが軽減され、大きくは増えなかった。従来リアル指導のみに比べ、同時期に多くの部活動へ事業展開ができる可能性を感じた。
- ・実際、札幌市教育委員会担当者からも高評価で、次年度以降の予算化や他の市立高校への導入へ向け1月より両者で協議に入った。
- ・一方でコスト面、部員たちの満足度など総合的な面からリアル指導とリモート指導のバランス（適正な回数）は今後を整えていく必要がある。
- ・ICTに不慣れな教員の場合、丁寧なケアが必要となるため、コーディネーターの役割の重要性もさらに感じた。

③-B 別エリアでの事象展開の可能性（A-bank北海道のサービス化に向けて）

- A-bank北海道の事業の柱でもある部活動支援事業にて、ハイブリッド指導を導入することで事業拡大の可能性、広域な全道各地への展開の可能性が広がった
- 既に道内1市2町からの問い合わせもあり、伊達市の道立高等学校では2月と3月に8種目での指導が決定
- 浦幌町の事例をモデルケースとし、部活動支援に留まらず、収益事業等の創出に対するサポートも担うことも視野に入れていく

現時点で試算している
ハイブリッド指導による
部活動支援事業参考価格
(1種目あたり)

	リアル指導	リモート指導	メニュー提供	コーディネーター派遣
年間約250万円	月2回	月2回	あり	あり
年間約215万円	月1回	月3回	あり	あり
年間約150万円	月1回	月1回	あり	あり
年間約120万円	×	月2回	あり	あり
年間約80万円	×	×	あり	あり

2023年2月現在指導可能な種目：野球、サッカー、バドミントン、バレーボール、バスケットボール、陸上、卓球、ソフトテニス、クロスカントリースキー、フィジカルトレーニング
指導可能な指導者の数：10種目 25名



(参考) 専門指導者 (元アスリート) のコメント



曾田 雄志 (そだ ゆうし) 元コンサドーレ札幌Jリーガー

大学4年次に全日本大学選抜に選出。
卒業後、コンサドーレ札幌北海道立札幌南高等学校、
国立筑波大学出身
一般社団法人A-bank北海道 代表理事
札幌市教育委員会「学ぶ力」推進委員
北海道教育委員会特別非常勤道徳講師



三上裕司 元NTT北海道実業団子供たち・日本 (現S/J) リーガー

札幌第一高校、青山学院大学へと進学し、
2002年NTT北海道実業団チームに入団。
日本ランキング最高位複8位。数々の成績を残し日本のトップで活躍。
5年間の現役生活の後、苫小牧駒澤大学バドミントン部監督を務める。
2016年7月に一般社団法人ノーススタークリエイションを設立し、
北海道で唯一のプロバドミントンコーチとして活動している。

■MethodBASEを活用してみて良かった点、課題点

- ・ナレッジを「メソッド化」することはやはり負担が大きいと感じたが、当初イメージしていたより入力しやすいと感じた。メニューのみならず、指導者にとって必要な基礎的なコーチングスキルもメソッド化できるとさらに素晴らしいプラットフォームになると感じた。

■ハイブリッド指導についてサッカーという競技特性の視点からの考察

- ・「見ていない時間」をどうフィードバックするかがポイントと感じる。リアル指導でなくても、個人の取組みに対する確認や動機付けはできると感じた。トレーニングを見たり管理するリモート指導ではなく、目標や取組みに対する確認や全体の統一感の確認ができるよいと感じる。

■他地域への展開の可能性について

- ・指導者・子供たちからも、「充実した・新しい気づき・もっと来てほしい」の感想を頂け、可能性は十分にあると感じた。また、A-bank北海道の多種目のアスリート・指導者のネットワークを活用し、他自治体での部活動のニーズに応えられる体制がすでに整っていることと、十勝うらほろ楽舎のような自治体との橋渡しやコーディネート経験は確実に必要になると感じた。

■MethodBASEを活用してみて良かった点、課題点

- ・各エクササイズを動画や図で解説することでバドミントンを専門としない方が指導にあたった際もイメージしやすい。子供たち自身がその動画を見て、自分たちで練習に取り組むことも可能である。
- ・練習メニューを作る側は、メニューの設定項目の数に限りがあるので、簡単に増減したり、修正できる柔軟性がほしい
- ・今回は、メニュー提示による教員の負担軽減を主に実施した為、振り返り・評価部分をうまく活用できるとより現場の状況が理解できると思う。

■ハイブリッド指導についてバドミントンという競技特性の視点からの考察

- ・練習メニュー提供→現場実践→リモートで疑問点の確認→次のリアル指導でポイント説明するという流れができ、このような手法に手ごたえを感じた。
- ・リモートをうまく使うことで、早めに疑問点の解消がスムーズになる。
- ・練習風景を撮影・リアルタイムでアドバイスも実施したが、想像以上に現場の雰囲気はわかった。一方で細かな技術面はリアルが必要なため、改めて定期的なリアル指導の必要性も感じる。

■他地域への展開の可能性について

- ・様々なエリアへの展開は十分可能である。MethodBASEを利用する上で、利用者(メニュー提供側、受け取り側)がより使いやすい仕組みの模索は引き続き必要である。

3. 実証から得られた示唆

- 本実証地域の北海道十勝郡浦幌町という人口規模における視点での示唆を以下に示す
(※なお、人口規模の理由で、関係ステークホルダーが限られているため都市圏とは特性が異なると認識)

1

人口が少ない地域では地域や学校の枠を超えた協力によって子供のスポーツ環境をいかに充実させるのか？

- **地域の子供たちを主語にした、域内外のステークホルダーの共通認識の醸成が必要**
- **リアルとオンラインを駆使したハイブリッド指導は教員の負担軽減だけでなく、少子化が深刻な地域・移動課題を抱える地域に有効的である**

2

地域/まちづくり団体/部活動支援事業者が一体となる事業で地域移行にかかる費用を確保できるのか？

- **域内外のステークホルダー間の調整・とりまとめるための、地域コーディネータの存在が非常に重要**
- **受益者負担を軽減する施策として、自治体と連携した企業版ふるさと納税、地域を巻き込んだイベント開催、地場産品を活用する商品開発は十分寄与できる**

3

部活動におけるICTの利活用は事業の継続・拡大に寄与できるのか？

- **既存サービスで雇用しているリソース（指導者のナレッジの活用）で、ハイブリッド指導という新たなメニューを拡張することが十分可能**

実証内容とその成果（実証から得られた示唆）

1

人口が少ない地域では地域や学校の枠を超えた協力によって子供のスポーツ環境をいかに充実させるのか？

実証から得られた示唆

- ステークホルダー（自治体、学校、教員、事業者）による共有の意識統一によるスムーズな議論が必要。そのために、主要メンバーによる「目指す姿」を議論することが重要（目指す姿や目的を明確にすることで、後戻りの議論や活動中で迷ったときに立ち戻る部分が重要）
- 子供たちの指導において、リアルとリモートを組み合わせたハイブリッド指導は十分可能性あり。特に少子化が深刻な地域は、移動課題の解決には時間を要するため効果が生まれやすい。また休日に限らず平日も緩やかにサポートするだけでも、教員の負担軽減に繋がることを発見。（注意すべきは、リモートのみではスポーツという特性上、現場の雰囲気・コミュニケーションは重要なためリアルも必要）
- MethodBASEを活用しナレッジを共有することは、指導者の確保・質の向上にも寄与することができる

更に進化するためのアイデア

- ステークホルダーがスムーズに議論が進むようなワークショップ・モデルケース・成功事例の情報発信の継続（「未来のブカツ」ビジョンの第2版など）
- ハイブリット型の指導の内容の充実
 - ・競技毎の〇〇メソッドの準備
 - ・技能レベル（初級、中級、上級）に応じたメソッド提供
 - ・技能以外のコンテンツ（思考力、栄養など）
 - ・ハイブリッド指導の取組みガイド（頻度設計等）
- 指導者の育成メソッドの構築
 - ・実技指導のできる指導者以外（少しだけ経験がある人材やICTを使いこなせる人材）でもファシリテートできる最低限のナレッジ（安全・安心）の提供
 - ・より指導力を伸ばしたい指導者がナレッジ共有ができるプラットフォームの構築

実証内容とその成果（実証から得られた示唆）

2

地域/まちづくり団体/部活動支援事業者が一体となる事業で 地域移行にかかる費用を確保できるのか？

実証から得られた示唆

- ステークホルダー（自治体、学校、事業者）による共有の意識統一によるスムーズな議論が必要。そのために、主要メンバーによる「目指す姿」を議論することが重要（事業モデル整備も環境整備同様の意識統一が重要）
- 民間事業者（＝事業活動）による部活動サービスの導入の場合、受益者負担が軸となるが、地域自治体と一体となりまちづくりの一環で部活動の地域移行を捉えることが重要。今回は、自治体と連携している十勝うらほろ樂舎のようなコーディネータがいることで行政・学校・民間との調整がスムーズに進み・前進も早いことが明らかになった
- 受益者負担を軽減する施策として、自治体の理解の上、地域と一緒に取り組む事業活動が有効である。（企業版ふるさと納税、地域と一緒に取り組むイベント開催、地場産品を活用した商品開発）は十分寄与できる
※本活動で重要なのは認知向上、企業や住民とのつながりの強化が重要

更に進化するためのアイデア

- ステークホルダーがスムーズに議論が進むようなワークショップ・モデルケース・成功事例の情報発信の継続（「未来のブカツ」ビジョンの第2版など）
- 地域自治体と連携できるコーディネータ組織の組成ガイドライン作りや企業版ふるさと納税の本テーマへの活用、収益事業のためのイベント開催のノウハウの横展開
- 地域で活躍するための人材の役割定義
部活動の地域移行における人材はコーディネータ以外にも地域指導者や事務や営業スタッフ等も必要
規模に応じた役割の明確化による内外からの人材獲得の実施
→近隣大学との連携やコーチバンクの作成
地域指導者向けへの事業者側からの講習会の実施など
- 民間企業と十勝うらほろ樂舎のようなコーディネータをマッチングを支援できるような仕組み

実証内容とその成果（実証から得られた示唆）

3

部活動におけるICTの利活用は事業の継続・拡大に寄与できるのか？

実証から得られた示唆

- コーチングビジネスを実施する民間団体（専門指導者派遣・出張コーチ・スポーツクラブ等）の既存サービスで雇用しているリソースで、経験豊富な指導者のナレッジを集積しコンテンツ化することで、ハイブリッド指導という新たなメニューを拡張することが十分可能。

※エリアの拡大（事業拡大）の事業機会の可能性あり

（新たなメニュー案）

- ・ コンテンツ提供ビジネス
- ・ リモートメニュー提供サービス
- ・ ファシリテーターサービス
- ・ 収益事業のプロデュース支援
- ・ 企業とのマッチング支援 など

- 今回活用したICT（NEC/MethodBASE）は、コンテンツの共有やメニュー提示においては十分に効果を発揮
子供たちがより直感的に利用できるUIがあると、担当教員を介さず、子供たち主体で利用できる可能性がある。

更に進化するためのアイデア

- 容易にナレッジを集積できるよう指導者にとってオープンなコミュニティの構築
- 指導内容（特にリモート指導）のカリキュラム化
 - ・ 目指すレベルに応じた、トレーニングメニューの内容や進め方の順序など基礎的情報が予め示されたうえで現場で試行錯誤できる環境の整備
- デジタルコンテンツとしてナレッジを保有することで、リアル指導不要だが、コンテンツのみ利用したいというニーズに対するコンテンツ販売
- 教員が不在でも、子供たちがより利用できるよう、レコメンド機能や、UIの改善、継続的利用促進のためポイントサービス等との連携など

プレスリリース

- 12月1日にA-bank北海道、NEC、うらほろ樂舎にてプレスリリースを実施
- 北海道エリアのメディア・自治体、関東圏の民間事業者等から問い合わせあり

2022.12.01

令和4年度「未来の教室」実証事業（テーマD：「未来のバカッビジョン」の実現に関するテーマ）採択のお知らせ

一般社団法人A-bank北海道、日本電気株式会社、一般社団法人十勝うらほろ樂舎、北海道浦幌町教育委員会の4者は、浦幌町の中学校における元アシリートによる部活動の指導サービスにおいて、ICTを活用したリアルとリモートのハイブリッド指導を導入することで、部活動の地域移行の受け皿創出に向けた実証を本年11月から開始しました。

本実証は、経済産業省が公募した令和4年度「未来の教室」実証事業（テーマD：「未来のバカッビジョン」の実現に関するテーマ）にA-bank北海道が採択され、NEC、十勝うらほろ樂舎、浦幌町教育委員会と共同で実施するものです。

「部活動地域移行の受け皿モデル創出に向けた実証」を実施について

一般社団法人A-bank北海道（注1、以下A-bank北海道）、日本電気株式会社（注2、以下NEC）、一般社団法人十勝うらほろ樂舎（注3、以下十勝うらほろ樂舎）、北海道浦幌町教育委員会（注4）の4者は、浦幌町の中学校における元アシリートによる部活動の指導サービスにおいて、ICTを活用したリアルとリモートのハイブリッド指導を導入することで、部活動の地域移行（注5）の受け皿創出に向けた実証を本年11月から開始しました。

本実証は、経済産業省が公募した令和4年度「未来の教室」実証事業（テーマD：「未来のバカッビジョン」の実現に関するテーマ）にA-bank北海道が採択され、NEC、十勝うらほろ樂舎、浦幌町教育委員会と共同で実施するものです。



【背景】

文部科学省では、これまで社会問題となっていた教師の長時間労働を見直し、生徒に対して効果的な教育活動を行うことを目的とした学校での働き方改革を推進しています（注6）。こうした中、部活動改革においては、休日の部活動から段階的に地域移行していくことを基本とする方針が示されています。

十勝毎日新聞 電子版
 Tokachi Mainichi News Web
 部活地域移行 浦幌の取り組み紹介 スポプラ北海道
 2022/12/11 12:30

【札幌】「第8回SPOPLA北海道ビジネスミーティング」が11月30日、札幌市内の会場とオンラインで行われた。部活の地域移行をテーマに、浦幌町での取り組みなどが紹介された。

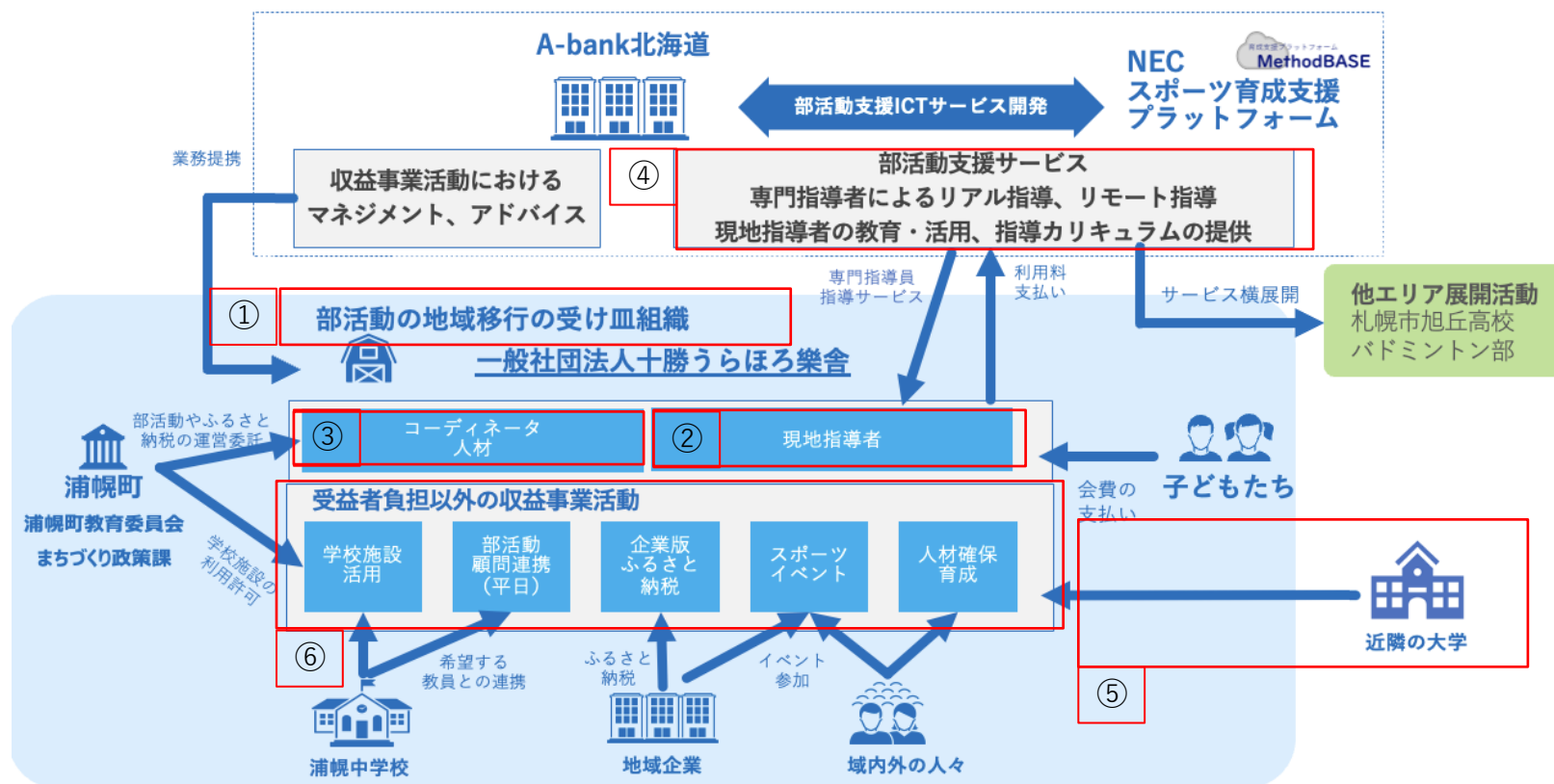


4. 今後の目指す姿

浦幌町における部活動の地域移行の自走化を見据えるため、浦幌町を軸とした目指す姿を示す

地域での部活動モデルとは（うらほろモデル（案））

■協議会の中で議論した目指す姿を再定義（「仮：うらほろモデル」）
 十勝うらほろ楽舎が起点となり、地域のコーディネータ組織を組成。
 スポーツ実施環境、それを支える体制の整備を行い、継続的な活動を推進。



- ① 部活動の地域移行だけでなく、多世代・多志向・多種目を実現する受け皿をつくる
※他町村との連携は今後協議の上、検討
- ② 指導者の平行ワークの推進
(日中は農家で働き、夕方は指導者など)
- ③ コーディネータが担う役割
・ステークホルダー調整
・企業連携による資金調達
・人材育成、採用のスキーム構築
- ④ 指導者が座学で学ぶ機会創出
カリキュラムを作成し、指導者の質を向上する
- ⑤ 近隣の大学と連携し、学生インターンの受け入れを実施
- ⑥ 「受益者負担」と「町費」だけに頼らない資金調達の仕組みが必要
・企業版ふるさと納税の活用
・地場産品を活用した商品づくり & 販売（ふるさと納税も活用）

次年度以降の活動（ロードマップ）

★当初計画からの追加・変更点

2022年度

- 浦幌町関係者による「うらほろ未来のブカツ協議会」の立上げ（A-bank北海道も参画）
 - 3年後のありたい姿を描き地域移行の姿を構想
- 協議会を軸に、サッカー・バドミントンの地域移行を実施
 - 元アスリートの専門指導による指導実施（まずは土日の地域移行よりハイブリッド指導を実施）
 - 平日はオンラインで地域指導者に指導プランを提供
 - 小・中学校一貫指導（9年間）の実施
- スポーツを契機に開かれた学校の実現
 - 学校教室を活用したイベント（座学や食育等）実施（学校施設の有効活用）
- 事業継続に向けた事業モデル創出
 - 収益事業の仮説検証（イベント、ふるさと納税等）
 - 受益者負担の意識醸成 & アンケート
- 次年度以降の拡大に向けたアクション
 - 協力パートナーの確保のため地元企業、連携大学、移住検討者に説明会を実施
 - 次年度の実施計画の立案

2023-2024年度

- 協議会は継続し、2022年度の実証で見た課題に対する打ち手の実行
- ★近隣市町村（東部3町）との連携した部活動の地域移行の検討・実施
- ★近隣市町村との連携するをする場合の送迎課題の検討
- 事業計画の策定
- 新たな部活動（陸上部・野球部）の地域移行を実施
 - 2022年度のモデルケースを元に、受益者に関する説明会を教育委員会と共に実施
 - 週3-4日の移行を目指す
 - 段階的に対象種目を増やしていく
- ★大会の出場申請などの事務業務の役割分担の検討・推進
- ★指導者や大学と連携した学びの場づくり
 - 近隣大学と連携し、大学生のインターンを企画・実施
 - 指導者が技術指導だけでなく、学びの機会を企画・実施
- 収益性の充実化を図る
 - スポーツイベントの充実、多角化
 - 町民参加型の収益事業の実施に伴う受益者負担の意識醸成
 - 地域資源を活かした商品開発・販売等
 - スポンサーの獲得、パートナーシップの構築
 - 企業版ふるさと納税の活用
 - 学校施設や廃校を活用した事業の検討（例：大学・高校の遠征の受入、住民向けサービス等）

2025年度

- 協議会は継続、ビジネスモデルが好循環し、自走できる状況
- ★東部3町の地域移行は完了
- 事業者と共にモデルケースを展開（うらほろモデルの他地域展開）

事業収支計画

- 今後浦幌町における部活動の地域移行の自走化を見据え、十勝うらほろ樂舎による事業収支計画を示す。
- ・ 地域の受け皿組織+ハイブリッド指導をメインにメインとなる競技にて算出し、売上は、主に受益者負担+企業版ふるさと納税の寄付(事業者収入)にて負担し、更なる工夫として、イベントや商品開発との連携で事業で活用できる収入を確保する計画

費用 (合計14,000,000円)		売上 (合計14,180,000円)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>A-bank北海道 (専門指導者によるハイブリッド指導サービス) の支払い</u> ・ 今後の拡大を見据えバドミントン・サッカー・野球・陸上の4種目で算出 ・ ハイブリッド指導月1回ずつ + メニュー提供、コーディネーター派遣 	¥6,000,000	受益者負担 ・ 1人3,000円/月を想定。 100人参加すると想定仮定 ※上浦幌地域・各種目の少年団高学年も含む	¥3,600,000
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>現地一般指導者への報酬</u> ・ 時給2,000円/人で換算(年125万円/人) ・ 1種目1名で算出 	¥5,000,000	事業費収入 ・ メインは企業版ふるさと納税の収益の50%を使用想定。過去実績と本年度の営業活動見込みより2,000万円の寄付を仮定。	¥10,000,000
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>地域コーディネータへの報酬</u> ・ 時給2,000円/人で換算 ・ 1名で算出 	¥1,000,000		
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>諸経費</u> ・ 大会出場費や備品購入など ・ 年間諸経費50万円/種目で算出 	¥2,000,000	その他収入 (イベント、商品開発) ・ 商品開発の収益の10%を使用想定。 1品目300万円/年の売上を仮定すると、3品目発売で、900万円/年の見込み。 粗利率20%で想定し、18万円/年の捻出。 ・ イベント収益、1回10万円程度を想定 年4回(春夏秋冬)で開催することで40万捻出。	¥580,000